

# 旧笹野家住宅付属建物 解体・記録保存調査報告書

2025 . 3

相模原市教育委員会





土蔵 解体前 東面 南から



土蔵 解体前 東面・北面 東から



外便所 解体前 西面 北西から



井戸上屋 解体前 東面・南面 南東から

# 旧笹野家住宅付属建物 解体・記録保存調査報告書

2025 . 3

相模原市教育委員会



# 例 言

- 1 本書は、令和4年11月28日から令和5年3月28日にかけて実施した「旧笹野家住宅付属建物解体保存業務」における解体・記録保存調査の内容をまとめた報告書である。
- 2 旧笹野家住宅付属建物解体保存業務は、相模原市緑区上九沢76に所在する国登録有形文化財旧笹野家住宅の付属建物である土蔵・外便所・井戸上屋の3棟について、倒壊等による被害を未然に防ぐことを目的として解体し、復元を見据え記録調査・部材保存を実施した。
- 3 編集にあたっては、事業の概要、建物の概要、解体および調査の概要、調査内容をまとめた。
- 4 解体および調査の概要、調査内容については、業務を担当した晴建築工房株式会社および協力会社の株式会社マヌ都市建築研究所がまとめたものを掲載した。
- 5 本文の作成は、第1章を内田真一郎（相模原市教育委員会文化財保護課）、第2章は有識者による既往の調査成果をもとに庁内説明を行う際に相模原市が作成した資料を掲載（一部加筆）、第3章第1節を倉住謙治（晴建築工房株式会社）、第3章第2節～第7章を道家祥平、小松妙子（株式会社マヌ都市建築研究所）が行い、編集は、内田が行った。
- 6 図面・表は業務中に作成した実測図、部材リストを掲載し、写真は業務前・業務中に撮影した各種写真のうち主要なものを掲載した。
- 7 業務から報告書刊行に至るまで、次の諸氏および諸機関より、ご指導・ご協力いただいた。記して感謝申し上げます（敬称略、順不同）。

大野敏（横浜国立大学）、原和之（相模原市立博物館）、旧笹野家住宅を考える会、北九州市文化企画課、富士吉田市富士吉田南エリア整備室（当時）、松江市文化財課、相模原市公共建築課
- 8 本文、図面ともに表示寸法はメートル法によったが、必要に応じて尺貫法を用いた。
- 9 本文中の寸法は、部材の墨出しや尺寸へ変換して、計画寸法（基準寸法）を考察して導いた寸法であり、図面の寸法については実測値である。
- 10 本報告書において使用する建物名称、方位は第2図によるものとする。なお、図面は主屋正面が南面とする。
- 11 調査で得られたすべての資料は、相模原市が保管・管理している。

# 目 次

巻頭図版

例言

第1章 解体および調査の経緯と経過	1
第1節 解体および調査に至る経緯	
第2節 解体および調査の体制	
第3節 解体および調査の経過	
第2章 笹野家および建物の歴史	3
第1節 国登録有形文化財旧笹野家住宅の概要	
第2節 笹野家および建物の歴史	
第3章 解体および調査の概要	7
第1節 解体の概要	
第2節 調査の概要	
第4章 土 蔵	11
第1節 形式・技法の調査	
第2節 痕跡調査	
第3節 墨書調査	
第5章 外便所	16
第1節 形式・技法の調査	
第2節 痕跡調査	
第6章 井戸上屋	18
第1節 形式・技法の調査	
第2節 痕跡調査	
第7章 まとめ	20
第1節 土蔵	
第2節 外便所	
第3節 井戸上屋	

部材リスト

図面

写真



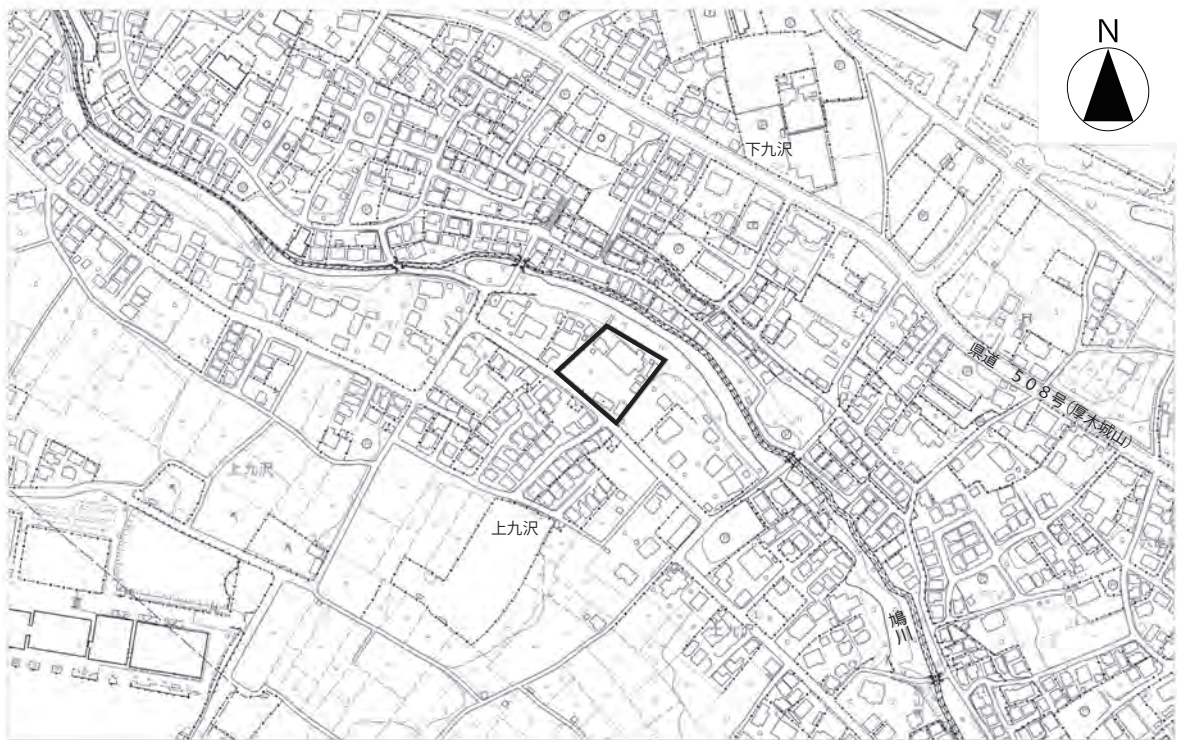
# 第1章 解体および調査の経緯と経過

## 第1節 解体および調査に至る経緯

旧笹野家住宅は、所有者であった笹野家によって大切に維持保存され、平成14年4月には長屋門が相模原市登録有形文化財として登録された（令和4年4月抹消）。しかし個人での保存が困難になり、平成27年4月に笹野家から相模原市に土地・建物が寄贈された。そして上九沢村の歴史や景観を今日に伝える貴重な文化財として、平成27年11月に旧笹野家住宅主屋と長屋門が国登録有形文化財（建造物）に登録された。相模原市では、ワークショップによる保存整備策を検討するなど必要な保存対策・環境整備を進めながら、地域活動および観光資源として活用する保存活用事業を検討している。

しかし平成30年10月の台風24号暴風雨被害により建物の劣化が進行し、特に土蔵は寄贈以前から屋根部分のずれが生じていたが、さらに北側へ大きくずれ落ち、基礎・外壁のき損により、流入した雨水や湿気によって木部の腐蝕が進行、折損するなど、強度が著しく低下した。外便所は屋根部材が落下し劣化が進行した。また便所であることから悪臭など著しく衛生上有害な状態にあることが危惧された。相模原市では各建物を修繕し現状保存できるよう検討していたが、令和2年2月には井戸上屋が倒壊したことから、土蔵、外便所についてもいつ倒壊してもおかしくない状況であり、隣接する民家や市民に損害をもたらす可能性があることから、このまま放置することはできないと判断し、周辺住民の生活環境の保全を図る為に、建物3棟の記録保存を行って、解体することとした。

解体保存業務は令和4年11月28日に着手し、業務期間は4ヵ月を要し、令和5年3月28日に完了した。



第1図 旧笹野家住宅の位置

## 第2節 解体および調査の体制

令和4年度の旧笹野家住宅付属建物解体保存業務に係る関係者は次のとおりである。

### ① 事業者

相模原市		市長	本村 賢太郎
担当所管課	教育委員会	教育長	渡邊 志寿代
	生涯学習部	部長	増田 美樹夫
	文化財保護課	課長	武井 弘子
総括監督員	文化財保護課	担当課長	松下 勝彦
担当監督員	文化財保護課	主査	内田 真一郎

### ② 業務実施

業務請負	晴建築工房株式会社	代表取締役	中山 晴喜
		現場代理人	倉住 謙治
協力業者			
記録調査	株式会社マヌ都市建築研究所	道家 祥平、小松 妙子、三浦 晶恵	
		打集 宣善、姜 翼林、霍 達	
仮設足場	株式会社大久保興産		
解体作業	齊藤工業		
大工工	有限会社齋藤工務店		
塗装工	飯塚塗研株式会社		
板金工	宮代板金工業		

## 第3節 解体および調査の経過

旧笹野家住宅付属建物解体保存業務の着手に先立ち、土蔵、外便所、井戸上屋を解体するにあたっては、令和4年6月に大野敏氏（横浜国立大学教授）へ現況説明を行い、さらに同年7月に清水擴氏（相模原市文化財保護審議会委員建築専門）へも現況説明を行った。相模原市文化財保護審議会各委員に対しては、同月、現状説明および現場視察を実施し、了承された。さらに地域住民および旧所有者親族で構成する旧笹野家住宅を考える会に対しても令和4年7月に説明を行い了承された。庁内では令和4年8月に相模原市教育委員会文化財保護課において解体に係る処理方針を定め、同月相模原市教育委員会定例会、同年9月の相模原市議会9月定例会議にて本業務および予算の承認を得た。

令和4年11月28日に相模原市は晴建築工房株式会社と旧笹野家住宅付属建物解体保存業務委託の契約を締結した。解体前の事前調査が必要なことから、記録保存については晴建築工房株式会社および株式会社マヌ都市建築研究所とともに外観・内部の実測、番号札の取付け、写真撮影から実施した。また記録保存について、特に土蔵内部は解体作業と並行して行わなければならないことから2社と解体方法、手順についても協議した。解体作業は残置物の撤去、仮設の準備を行った後、令和4年12月21日からまずは井戸上屋、外便所の解体を実施した。土蔵の解体は、令和5年1月に入り足場組立後、置き屋根、外壁等の記録調査を行い、同年1月17日から開始した。民地に接し、敷地が狭かったことから重機の置き場がなく、解体作業は手作業で実施せざるをえなかった。置き屋根が解体され、内部の残置物等を搬出次第、扉等の建具および小屋組や床下の調査を平行して行った。基礎および礎石は残して、令和5年2月24日に土蔵の解体を終了した。記録調査はその後も部材の実測、写真撮影等進め、令和5年3月10日に記録調査を終了した。

なお、解体した部材のうち将来の復元時に利用できる選定された部材や金具は、旧笹野家住宅の付属建物である物置内に保管している。部材保管にあたり物置の土台、柱、外壁の一部を修繕した。

## 第2章 笹野家および建物の歴史

### 第1節 国登録有形文化財旧笹野家住宅の概要

#### (1) 文化財の登録

所在地	相模原市緑区上九沢字寺上76
国登録の建物 主屋	1棟：木造平屋建、瓦葺、建築面積 211㎡、登録番号 14—0196
長屋門	1棟：木造平屋建、鉄板葺、建築面積 43㎡、登録番号 14—0197
登録年月日	平成27年11月17日
所有者	相模原市
特徴・評価（登録基準：一 国土の歴史的景観に寄与しているもの）	旧笹野家住宅は、江戸末期から明治期の主屋、長屋門、付属屋などが敷地内に一体で残されており、相模原市内の当該期における上層農家の景観を今に留める希少な建造物かつ規模・形式とも充実した近世民家建築であり、旧家の屋敷景観に寄与している点が評価される。

#### (2) 主屋

桁行約17m（9.5間）、梁行約10m（5.5間）の規模をもつ、六間取の大型民家。屋根は草葺屋根を瓦葺に改修し、土間の一部に小部屋を設けたり、背面部分を拡張したりしているが、全体的には建具・調度品を含めて旧状を留めている。

この主屋に関しては、明治2年1月起帳の「出火見舞帳」「普請書道具懸帳」「家作引取控之帳」の3冊の記録が残されている。これによれば、明治2年1月の早々あるいは明治元年12月の末頃に、主屋は火災によって前身建物が焼失。これにより、同家は津久井の長竹村稲生にあった空き家を同年1月25日に購入し、解体して部材・建具を当地に搬入、建築を始めて4月頃には概ねの工事を終わらせた。また、昭和3年の記録によれば、同家では昭和天皇の御大典を記念して、同年9月から12月にかけて主屋の屋根の葺き替え、便所廊下の増築、居宅裏の増築を行った。

主屋は、長竹村当初の建築年代は不明だが、江戸時代の建築であることは間違いなく、明治2年に移築された建物であることが記録とともに判明している。

#### (3) 長屋門

桁行11.7m（約6.5間）、梁行3.6m（約2間）の中規模の長屋門で、建築年代は江戸時代末期頃。軒は上部梁行梁の端部を持ち出してセガイ形式としており、構法としては新しい。材質は杉を主とし、戸口の柱および扉にケヤキ材を用いている。左右の部屋は土間で、農具類の収納場所として使用されてきた。現在はトタン屋根であるが、昭和18年に撮影された写真から、草葺きの屋根であったことが確認されている。

### 第2節 笹野家および建物の歴史

#### (1) 由緒

相模原市緑区上九沢に暮らした笹野家は、江戸時代の後期には上九沢村の名主を務め、明治時代の初期には大沢小学校の前身になる九明学舎（後に九沢学校）の世話役を務めるなど、この地域の村政・教育に深く関わってきた名望家であった。家業としては農業・養蚕経営を主体としたが、明治7年には神奈川県から質業の免許を受けている。

明治2年3月の上九沢村宗門人別帳によれば、笹野家は笹野源之丞を当主に、妻・娘夫婦・妹・孫2人の7人の家族、年季奉公の下男下女3人、合計10人の世帯であった。

建物に関する調査は、昭和48年に神奈川県教育委員会と横浜国立大学関口欣也氏が主屋の調査を行っている。昭和60年には相模原市教育委員会と東京工芸大学清水擴氏が長屋門、物置、主屋に係る古文書を調査し、平成23年にも相模原市教育委員会と清水擴氏において主屋平面図、敷地内建物配置図作成等を実施している。平成24年には横浜国立大学大野敏氏による付属建物の調査を行っている。

相模原市登録有形文化財の登録は、本市文化財保護審議会での調査審議を経て、郷土の生活文化を知る上で必要な建造物として、平成14年4月1日に長屋門が登録されている。のち令和4年4月1日の文化財保護法改正（地方登録制度の新設）に伴う相模原市文化財の保存及び活用に関する条例の一部改正により登録が抹消された。

国登録有形文化財の登録に関しては、主屋および長屋門ともに平成25年の文化庁調査官による現地調査、平成26年の登録意見具申、平成27年の寄附受納、同年7月の国文化審議会答申を経て、平成27年11月17日に登録された（文部科学省告示第181号）。

## （2）屋敷配置

旧笹野家住宅は鳩川上流部の南側、上九沢の旧来からの集落中央を南北に貫く主要道沿いに屋敷地を構える。屋敷の背面は竹林になっており、竹林を挟んで鳩川に接している。

屋敷地は東西約50～45m、南北約50mの台形を呈し、この中央やや北寄りに南向きの主屋を構えている。付属建物は、主屋のほぼ正面方向、前面道路に沿って長屋門を構え、長屋門の東に並んで物置を配する。この物置の背面には、東側屋敷境に沿って穀蔵、機械小屋、家畜小屋と外便所を配している。主屋の西側には土蔵を配し、主屋背面には井戸上屋を設けている。井戸は土蔵の北側にも掘られている。また、土蔵の南側には屋敷神の稲荷社を祀り、北側には御嶽神社を祀っている。稲荷社の南、西側敷地境寄りには、かつて離れの書院があったが、現在、その跡地のところには九明学舎の記念碑が建っている。

主屋前面の庭部分は、現状はほぼ一面に植栽がなされて庭園となっている。屋敷林は、物置南側の前面道路に沿うところには、防火林であったと考えられるカシの類の古木があった。東側屋敷境にはケヤキなどの大木が並んでいる。長屋門の西側、前面道路沿いから西側屋敷境には低木の生垣をめぐらせている。主屋背面にはウメその他の低木が混在しており、鳩川沿いは竹林となっている。

## （3）物置

桁行9.1m（5間）、梁行4.5m（2.5間）、軒まわりはすべて腕木を柱に柄差しとするセガイ形式であり、古い構法である。建築年代は江戸時代末期～明治時代頃と考えられる。内部の壁周りには、入口部分を除いて腰高の高さにブロックを積み、補強を施していた。

## （4）穀蔵

登り梁構造の二階建の土蔵で、主屋の西側にある土蔵より一回り小さく、桁行6.2m、梁行4.2mである。建築年代は明治32年である。棟梁に明治32年10月、笹野源兵衛建立の墨書が確認されている。また、二階の収納棚の柱には昭和2年改修の墨書があった。食器、家財道具、農具等を収納していた。平成25年～26年頃に倒壊し、旧所有者により解体された。今回の業務に際し、敷地内から棟梁が発見され、保管した。



発見された棟梁

### (5) 機械小屋

桁行 3.7 m、梁行 1.9 m。昭和時代戦後の建築で、農業用機械や器具類の収納場であった。

### (6) 家畜小屋

桁行 7.4 m、梁行 4.7 m で、南面に 1 間の下屋を出している。この下屋部分は柵で囲み、家畜の飼育場所となっていた。建築年代は不明である。

### (7) 外便所

桁行約 1.97 m、梁行約 2.21 m。建築年代は、今回の業務により昭和時代初期と考えられる。

### (8) 土蔵

桁行約 6.14 m (約 3.5 間)、梁行約 4.1 m (約 2.5 間)、登り梁構造の二階建の土蔵である。文書・家財・衣類等を主として収納していたと考えられる。

この土蔵の置き屋根は、天井部の葺土の上に立てた束に載せる構造であるが、束から外れて北側にずれ落ちている。天井部を支える太い牛梁についても天井部の葺土とともに崩落し、二階床部分を大きく壊して、一階の床面にまで落下している。内部にあった家財などもかなり損傷を受けている状況であった。

### (9) 井戸上屋

桁行約 2.83 m、梁行約 3.68 m。内部には手押しポンプと電動ポンプを付けた井戸がある。電動ポンプは昭和 16 年に設置したもので、隣接する主屋の流しに送水していた。令和 2 年 2 月に上屋が倒壊した。

### (10) 書院

離れの書院は、終戦後の頃に近くの縁者の居宅として移築され、現在も使用されている。離れの当初の建築年代は不明であるが、昭和 3 年の記録によると、同年の昭和天皇の御大典を記念して建築したとある。なお居宅されている為、調査履歴はない。



第 2 図 旧笹野家住宅の屋敷図



屋敷全体 南から



屋敷全体 北東から



主屋 南西から



長屋門 南から



物置 西から



穀蔵 西から



機械小屋 西から



家畜小屋 西から

## 第3章 解体および調査の概要

### 第1節 解体の概要

#### (1) 事前調査

- ①土蔵・外便所・井戸上屋の現状確認を行った。
- ②外便所・井戸上屋の既存状態・部材調査を行い、順次番号札の取付けを行う。
- ③井戸上屋は倒壊していた為、出来る範囲で番号札を取付け、その他の部材は解体と合わせて部材調査と番号札の取付けを行った。
- ④土蔵は置き屋根が陥没している為、内部調査は解体と平行して行い、その他の部材調査と番号札取付けを行った。
- ⑤物置内部と外部周辺の残置物を、保管する物と廃棄処分する物とを確認した。
- ⑥解体に伴い、各建物に石綿等含有の有無を確認した。



事前調査 土蔵 北から



事前調査 土蔵 南東から

#### (2) 土蔵の解体

- ①土蔵解体にあたり北西に傾き、ずれ落ちそうな置き屋根の位置に合わせ、外部足場を組む。令和3年度に屋根落下防止の為に設置した単管パイプサポートを撤去し、飛散防止ネットの固定ロープを外して、調査および置き屋根解体に備えた。
- ②既存部材の実測等を行い、解体前に可能な範囲で番号札の取付けを行った。
- ③傾いた置き屋根の軒先から屋根波板板金を剥がし、屋根中央部は安全帯を親綱に取付け、土蔵中央部の棟板金を剥がした。屋根垂木下地の状態にした後は足場より届く範囲で垂木下地材を解体し、登り梁(扱首)を撤去した。土屋根および内部仕上げ野地板が脱落している為、手の届かない屋根垂木や登り梁(扱首)は土蔵内部に落下させ、土蔵内部での安全作業状況を確認した後に撤去搬出とした。
- ④置き屋根解体時、箱棟内部より墨書きのある木札を確認した。「明治三十五年十二月良辰 葺之 笹野 籬蔵」「大工 石井佐吉 武力師 田中駒次郎」と記載されており、置き屋根修繕の記録とみられた。修理歴の墨書の翻刻は原和之氏(相模原市立博物館)に依頼した(以下同じ)。
- ⑤鉢巻板金を剥がすと、下地薄板の下に貫板がL型に組み、桁まで届く5寸釘で打ち付けてあった。棟梁の上に載っていた野地板(厚板)は、落下した棟梁と一緒に崩れて落下し、一部は二階の床板を脱落させ、かろうじて残った二階床の上に、一部野地板が引っかかる状況であった。
- ⑥二階観音開きの蔵扉・蔵戸廻りの調査と、屋根上の足場組と解体作業を行い、妻部分、鉢巻部分の土壁、二階床梁の落下に注意しながら、二階に残った残置物、垂木材等を搬出した。
- ⑦西面土蔵内部、「に十」の柱妻部分に木札が取付けてあったが、墨書きは無く、詳細は不明であった。

- ⑧二階残置物の撤去、屋根垂木材・野地板材（厚板）を搬出した後、一階残置物の搬出を行い、二階屋根の崩れて落下していた土を搬出した。残置物は出来る限り写真を残し、箆笥や書物・家財道具・手書きの書物は長屋門に保管した。
- ⑨一階床部分の残置物の大半が搬出できたところで、残っていた二階床梁に単管パイプにて落下防止措置を行い、内部木材・残置物・土の搬出撤去を行った。一階床板は基礎下まで落ち込み、大引き材も腐朽が激しく、棟梁も雨漏りにより腐朽の範囲は表皮上面全体に広がっていた。
- ⑩棟梁以外の落下物が無い事を確認し、東面壁に引っかかっていた棟梁の撤去を行った。長持ちが梁に挟まれている為、棟梁撤去と合わせて解体した。手動チェーンブロックを玉掛けワイヤーで吊り下げ、棟梁を吊り、二階床より棟梁先端3mほどの場所から切断（「に四」付近）。一階へ下し、次に棟梁下から1m程の部分で切断した（「に十」～「に七」付近）。棟梁を一階床に下し、さらに1m部分を切断し、残り3mを一階床に下した状態で、再度1.5m程に切断し、約6mの棟梁を5本に切断して搬出した。
- ⑪作業の合間を見ながら、可能な限り各部材に番号札を取付けた。
- ⑫一階部分には、柱間にはめ込まれた板材、その板材に重ね張られた板材があったが、造作棚など、落下した材で破損し判断出来ない部材も確認された。
- ⑬二階床梁の解体前に内壁壁板の解体と搬出、南面下見板張りの外壁の解体を行った。
- ⑭二階床材を剥がし、根太・二階へ登る入り口枠材を解体し、二階「三」通りの床梁をベルトスリングで緊結しチェーンブロックで引き上げた状態で、柱と梁のホゾ部分を抜き、一階床に下した。
- ⑮仕口加工部分は1/3程が腐朽等で欠損しており、いつ外れてもおかしくない状態であった。
- ⑯棟梁・床梁を撤去した状態では水平方向の構造体力が無くなり、土壁の解体を行うとさらに壁耐力も無くなり倒壊の危険が増す為、垂木にて柱と足場パイプを番線で緊結し、倒壊防止措置を行った。
- ⑰下見板外壁はササラ子を外し、上下の幕板を取り外し、下見板を外したが、下見板の取付けは上下で突っ張るような取付けと、外壁の折れ釘に引っかけるような施工であった。
- ⑱土蔵入口の扉3枚（正面漆喰土引戸・中間板格子戸・奥腰板障子戸）を搬出した。
- ⑲内壁の板を一階部分から剥がし、同時に土に埋まった一階の残置物（長持ちや箆笥等）を搬出し、床に残った土の搬出後、一階床板の解体搬出、大引き材を解体搬出した後、竹小舞の土壁の解体を行った。
- ⑳二階壁の土を土蔵内部へ削り落とす様に解体し、近隣へ土埃が飛ばないように、防災ネットを張り、隙間を埋めるなど対応し、さらに散水を行いながらの土壁解体を行った。
- ㉑二階観音開き扉の搬出は、重量があり解体した。被せてある板金を剥がすと、向かって右側の女戸側は漆喰化粧仕上げの扉が現れ、一部表面の漆喰はサンプルとして、下地の木柄部分も合わせて保管した。向かって左側の男戸側は化粧の漆喰仕上げでは無く、平らな漆喰仕上げにブリキ板で補強のような施工がされていた。
- ㉒枠の実柱には墨書きがあり、「相州九沢村 藤吉様」「□□□□□ 越後屋 七兵衛」と判別された。
- ㉓外部廻りの土壁を剥がし、竹小舞を解体後、土蔵外周の残土の搬出を行った。腰巻の砂利と土壁は処分の区分けが違う為、分別して処分した。
- ㉔一階扉は重量が300kg近くになる扉である為、解体し部分保存とした。一部表面の鰹繰（かんどり）廻りは表面漆喰を保存し、向かって左側の男戸は扉下部の下から400mm程の所で扉を切断し、女戸は扉上部300mmと中央400mm鰹繰部分を切断してサンプル保存とした。
- ㉕実柱廻りの漆喰壁の解体後、実柱「ほ一」の北面内側に「□目形式捨五貫目」、実柱「は一」の東面に「木製七寸□□□」と墨書きがあった。
- ㉖実柱は「は一」と「ほ一」の柱から上下一対のクサビで固定されており、実柱を外した後、肘ガネを外した。大きい金属ピンのような込み栓で抜け止めとなっており、扉側の肘ガネは扉の幅の半分以上差し込まれた長さがあった。
- ㉗下屋の解体前に下屋の上で組んである足場の組み換えを行った。



- ⑳下屋の平板金を解体する。野地板が張られておりその下に下地屋根垂木が並び、さらにその下に化粧野地板が張られており二重張りとなっていた。
- ㉑破風板金を解体し、丸太桁の小口板金を剥がした。
- ㉒足場よりロープで丸太桁を吊り、柱と丸太桁のクサビを抜いてから一階に下し搬出した。
- ㉓下屋平板金の裏側には、当時の商品名かメーカー名が印字されており「CAN B ○○○○ #28 ガン印」と印字されていた。
- ㉔「い一」～「い十」の桁と「と一」～「と十」の桁、西面の柱「い十」～「と十」の内、「ろ十」～「へ十」を撤去した。柱の素材はケヤキとヒノキ材で、妻面は桁方向より長く（約6m）、重量もあり、通し貫き板は柱のゆがみや釘などがある為、そのまま抜けては来ないので、柱間で切断し1本ずつ柱を抜いて対処した。柱根本の根がらみ材と腰巻下地の板材が3寸釘等で固定している為、腰巻の漆喰コンクリートを解体して、根がらみ板、下地板を撤去してから、柱を撤去した。
- ㉕腰巻の漆喰コンクリートを撤去すると、杉皮でケヤキ板が覆われおり、板材を水分から守るような施工がされていた。板を固定する下地材が柱間に取付けられており、その下地材には水抜き穴が3箇所あったが、ケヤキ板の土台は外周側に腐朽が広がっており、下地材はその補強で修繕されたようにも考えられる。使用されていた釘は洋釘であった。
- ㉖「と十」付近の腰部基壇コンクリート内部には新聞紙の破片が埋め込まれており、昭和35年11月5日付けの新聞紙が混ざっていた。その他にも「と五」辺りからも新聞紙は出て来たが、年代を示す部分は確認できなかった。
- ㉗腰部基壇コンクリートは、灰色コンクリートの固い部分と、白く漆喰だけで砂利を固めた部分と混在しており、「十」通りには3～4mm程度の鉄筋が中に入っている箇所もあれば、「と」通りには入っていない箇所もあり、施工の内容が統一されていなかった。杉皮の固定とコンクリートの下地として、腰巻上面から300mm程の部分に、竹に荒縄が巻かれた補強材も入っていた。
- ㉘土台は、上下2段となっており、上下はホゾ穴が彫られ、ずれ防止の木込み栓が2m間隔で施工されていた。土台と基礎は緊結されておらず、基礎石同士も緊結は無く、2段の基礎石の下は自然石を埋め込み砕石として地均しが施工されていた。
- ㉙土蔵の礎石は、現状保存することから、礎石を固定する為、ロープ止めを礎石の両脇に1本ずつ地面に差し込み、ステンレス線2本で礎石を固定し、礎石が移動しないようにした。「い」通りと「と」通りにある石の通気口も、ずれ防止として同様に固定した。切り出した長方形の礎石下の施工方法を確認する為、「と」通り「五」の礎石脇を一部削り、礎石下の砕石状況を確認した。
- ㉚外部足場の撤去を行い、土蔵の解体作業を終了した。

## (2) 外便所の解体

- ①仮設足場を設置して、外便所の屋根板金を剥がし、仮組みしてあった筋交いなどを解体した。
- ②竹小舞・土の一部をサンプルとして取り出し、小便器など陶器部材を外して保管した。
- ③解体後、基礎の便槽部分土間に穴を開け、水抜き穴とし、升部分は土砂にて埋め立てた。

## (3) 井戸上屋の解体

- ①屋根はすでに倒壊していた為、解体しながら番号札の取付けを行った。
- ②使用不明部材もあり、検討をしながら調査と解体を行った。
- ③井戸ポンプの撤去にあたっては、井戸への脱落防止として、電動・手動ポンプ共に本体と鉄管を固定し、ポンプ本体下で鉄管を切断してポンプ本体を撤去、鉄管は3本に分割切断して撤去した。
- ④井戸の穴については、危険防止として蓋を作成し閉じて作業を完了した。

## 第2節 調査の概要

### (1) 調査の方法

調査は、倒壊等による被害を未然に防ぐ為、土蔵・外便所・井戸上屋の解体と部材保存等を実施するにあたり、復元の際の基礎資料として、写真および図面の作成、痕跡や部材の記録調査を行うことを目的とした。

解体部材のリストを作成し、部材の保存状態を鑑みて、保存していく部材を選定した。また、棟札や墨書等による建築年代の特定など、歴史的建造物としての評価に関する調査も実施した。

具体的には、実測調査（解体前および解体作業中、解体作業後）を基本としながら、以下の点の確認と調査を踏まえて、現況建物の図面作成と解体部材調査とリスト作成、スケッチ等による記録調査を実施した。

- ①現況（寸法、破損の状況、高さ、構造、造作の形式、仕上げ）の確認
- ②使用材料の確認
- ③材料に残る痕跡、その他の痕跡の調査
- ④写真による記録（外観、内部）、調査事項の記録
- ⑤敷地配置図、各階平面図、立面図、断面図および軸組図、矩計図、伏図等の実測および図面作成
- ⑥上記のほか、土蔵の蔵戸周囲の部分詳細の実測および図面作成
- ⑦墨書、お守り札などの紙張り、和釘や洋釘等の確認・記録
- ⑧部材リストの作成、保存すべき部材やサンプル保存部材の確認

### (2) 構造型式と主要寸法

- ①土蔵 主要寸法 : 桁行 6138mm、梁行 4092mm（実測寸法）  
構造形式 : 土蔵造二階建、切妻造平入、波形鉄板葺き置き屋根、東面  
建築年代 : 天保 15 年に建築。明治 27 年に修理。正面出入口の方立の墨書より判明した。  
明治 35 年に置き屋根の葺替え。置き屋根の箱棟内にあった棟札より判明した。  
上記は今回の調査により判明した。
- ②外便所 主要寸法 : 桁行 1974mm、梁行 2208mm（実測寸法）  
構造形式 : 木造平屋建、切妻造、波形鉄板葺き、西面  
建築年代 : 不明
- ③井戸上屋 主要寸法 : 桁行 2825mm、梁行 3680mm（実測寸法）  
構造形式 : 木造平屋建、切妻造、波形鉄板葺き、南面  
建築年代 : 不明



調査風景 土蔵 南から



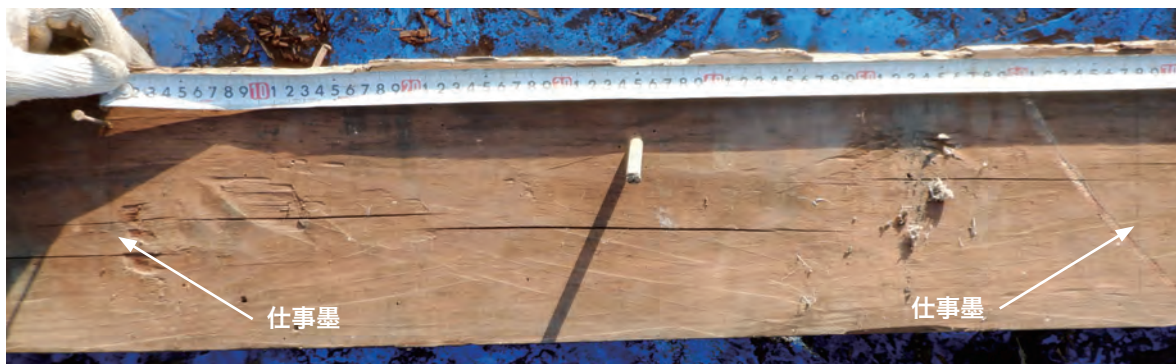
調査風景 土蔵 東から

## 第4章 土蔵

### 第1節 形式・技法の調査

#### (1) 柱間・計画寸法

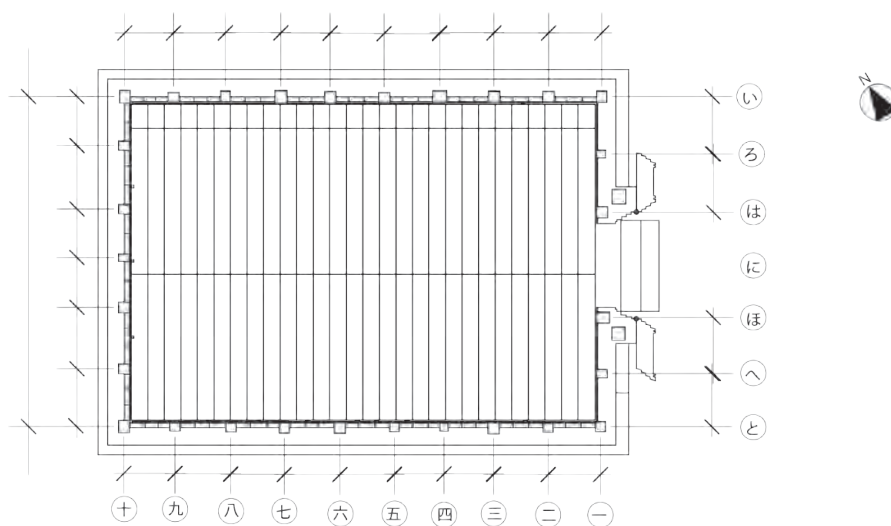
土蔵の柱は、曲がった材を用いており、柱間の実測によって計画寸法を解明することはできなかった。解体調査によって、桁の仕事墨から柱間の計画寸法を計測することができた。柱間の計画寸法は桁の墨出しより682mmの2尺2寸5分を基準としていた。



桁の仕事墨の実測

また番付は、主に柱下に記されており、東西方向を平仮名いろはにほへ迄の表記とし、南北方向は漢数字の一から十の表記とした北東角を始まりとした組合せ番付であった。

北端から南端にかけて東西軸は、「い」～「へ」、東端から西端にかけて南北軸は「一」～「十」であったが、柱間に番付を割振ると東西軸は「い」～「と」迄であることが分かった。本調査では、柱間の割振で振った「い」～「と」迄の番付を用いて図面および部材調査を行った。



第3図 土蔵の番付平面図

#### (2) 基礎

基礎は、地盤面の上に凝灰岩の切石積みが2段積まれており、その周囲には腰回りに施されたモルタル仕上げの基礎石としての切石基礎が廻っていた。地業は、2段の凝灰岩の切石積みの周囲は締固められ、腰回りに施されたモルタルの基礎となる切石下は石灰と碎石を混ぜたと考えられる地業が施されていた。

腰廻りに施されたモルタル仕上げは、解体調査により、石灰と砂利を混ぜたもので、鉄筋などは入っていない。土台上には貫穴と土壁の小舞穴があり、もともとは土壁であった痕跡がある。貫穴上には後施工の設えの土壁見切り板があり、土台上は土壁がなく空洞である。腰廻りのモルタル仕上げを施す為に土台上の下部の土壁を撤去したと考えられる。

床下には大引きを直接受ける礎石があり、レベル調整を図る為、2段組みとなっていた。2段組みの礎石は固定などしておらず、ずれ落ちており、一階床の不陸の原因となっていた。

通気口が南北面に1箇所ずつ計2箇所設けられていた。紋様が施された石蓋の通気口は腰廻りのモルタルと同じつら面であり、腰廻りのモルタルと同時期に施されたと考えられる。

南面と北面には、土に埋もれていたが雨落ち石が据えられており、当初のものと考えられる。正面下屋庇の基礎は後から打設したモルタル仕上げであり、見切りの縁石は、腰廻りのモルタル下の切石と同じ切石が施されていた。同様の石材で下屋庇の軒桁を支える丸柱の角石状の礎石が据え付けてあり、柱のホゾを受ける加工が施されていた。

正面の階段石は、岩肌のある基礎石積み仕上げとは異なり、平滑な仕上げが施されていた。



基礎および土台 南から



解体後の基礎 東から

### (3) 軸部

柱は、2尺2寸5分を柱間計画寸法の基準とし、ヒノキの柱は鉛直で製材したものであったが、ケヤキの柱の多くは、湾曲した柱を用いていた。いずれも2段積みの基礎石の上に2段積みのケヤキ材の土台を敷き、その上を通し柱を立てる。ケヤキの柱は、湾曲の少ないものは四隅の柱に用いており、妻面の西面と東面の柱は湾曲した柱を用いていた。ヒノキの柱は南面と北面とも「三」、「六」、「九」通りにあった。

貫は約540mmピッチで背120mm、厚み30mmの材が用いられており、柱の両端部は込栓が施されていた。



解体中の軸部 南東から



ケヤキ材の湾曲した柱 南から

小屋組は、棟梁が落下し崩壊していたが、置き屋根を解体したことで状態が分かり、落下していた部材からは登り梁や垂木などは見つからなかった。棟梁の上に厚さ 60mm のヒノキの化粧天井の野地板が架けられた構造と考えられ、「は一」・「は十」、「ほ一」・「ほ十」の柱で支えられた両妻壁の梁が棟梁を受ける構造であったことが分かった。妻部は登り梁があり、又首構造となっていた。

一階の床組は、破損が著しく天井が崩落していた為、葺土で埋もれていたが、解体作業において土を取り除くことで現況を把握することができた。根太はなく、直接大引きの上に厚み 18mm のヒノキ材の床板がのっていた。大引きのサイズ、ピッチは統一ではなく、平均として幅 150mm、背 70mm、ピッチは 300mm 程であった。床板は 1 段目の礎石の天端と合わせていた。二階の床組は、梁間方向の「四」通りと「七」通りに幅 150mm、背 300mm のヒノキ材の床梁があり、660mm のピッチ、幅 70mm、背 85mm の床根太の上に厚み 18mm のヒノキの床板がのっていた。

下屋庇の垂木受けを支える支柱は、腰廻りのモルタル基礎の上に建っていたことから、下屋庇は土蔵本体とは独立した造りであった。庇桁は直径 240mm の丸太材であり、直径 180mm の丸柱が支える。この丸柱の柱脚は円形状にモルタルが据えつく。また下屋庇の垂木受けのぶれ留めとして土蔵の隅柱「い一」・「と一」より L 字金物が打ち込まれている。柱脚のモルタルとぶれ留めの金物は、土蔵と独立した下屋庇が動かないようにする為のものと考えられる。下屋庇は化粧垂木および化粧天井の上は胴縁と野地板があり、さらにその上には野垂木と野地板が張られトタン葺きであった。野地板が 3 枚あることから、屋根下地を重ね直していると考えられる。なお、トタンにはメーカーのロゴと考えられる鳥の印字があり「CAN B○○○○ #28 ガン印」と表記されていた。



トタン材の印字

#### (4) 造作

土壁は、柱芯より 200～220mm の厚さであった。竹小舞は平均して直径 24mm が用いられており、直径 18mm の竹小舞は重ね継手で組まれていた。柱の貫の上下に、落とし込むことができる穴を加工しておき横竹を設置し、それと直角に重なる縦竹は柱間に施工し、柱の外側を鋸状に加工し、水平方向の横竹を 150～180mm ピッチで設置してあった。これらの井桁状の竹小舞はツルを使い結び止められており、竹小舞から下げ縄が施され、土壁が塗られていた。また、土壁の仕上げ面に合わせて、洋釘が打ちこまれた胴縁が施されていた。この胴縁は南面の下見板や東面、北面、西面のトタン張りの胴縁として使われていた。



小舞下地

外壁は、南面のみ下見板張り仕上げであった。西面、北面、東面は白ペンキで塗装された波板トタン張りであり、土壁に打ち込んだ胴縁を下地とした。鉢巻き部は白ペンキで塗装された板金仕上げであり、土壁に当て板を施して、板張りとし、その上から板金仕上げとなっていた。一階、二階とも漆喰扉の鳥居枠は白漆喰で仕上げられていた。4 面とも土壁に漆喰仕上げの痕跡はなかった。

内壁は、板壁仕上げであった。一階は厚さ 60mm のヒノキの板壁が柱の間に挟みこむように貫に打ち込まれ、同様に二階も厚さ 15mm のヒノキの板壁が柱の間に挟みこむように貫に打ち込まれていた。一階は床から天井まで横板張りが柱に打ち込まれていた。この横板張りは、崩壊して確認できなかった押入れの背板と考えられる。

二階は、西面妻壁の「ほ」～「と」間にケヤキの縦板が打ち込まれていた。階段は、梯子階段が置かれ、上り口には高欄が設置されていた。

#### (5) 屋根・置き屋根

土蔵の屋根は、化粧天井の野地板の上面にヒノキ皮が和釘により打ちつけられ、丸竹材、荒土、中塗り土、上塗り土、白漆喰仕上げの順に施されており、おおよそ土および漆喰部分の厚みは570mmであった。

土蔵の屋根上部は置き屋根であり、又首構造の登り梁が置かれ、棟木と母屋、垂木を受け、屋根棧の上から鉄板（トタン）葺きとしていた。置き屋根は箱棟であり、棟木を挟みこむように箱棟の木杵が又首構造の登り梁に洋釘により打ち込まれていた。箱棟の仕上げは板材を下地とし、板金仕上げであった。下屋庇の屋根や窓上の小庇も板金仕上げであった。

#### (6) 建具

一階の東面の正面は、漆喰塗りの観音開きの扉であった。さらに内側は3溝の引戸であり、外側から漆喰塗りの土引戸、腰部を鉄張りとした鍵付きの格子戸、腰板障子戸であった。腰部を鉄張りとした格子戸の下端には菊をモチーフとしたと考えられる文様が施されていた。

二階の東面の正面も、漆喰塗りの観音開きの扉であり、板金により覆われていた。内側は2溝の引戸であり、外側から漆喰塗りの土引戸、鉄製の格子組に亀甲金網を張った嵌め殺し格子窓であった。

二階の出入り口部分には、二階床板の下にスライドさせる縦板張りの板戸が設置してあった。



一階正面の建具  
漆喰塗りの土引戸



一階正面の建具  
腰部を鉄張りとした格子戸



一階正面の建具  
腰板障子戸



二階正面の建具  
漆喰塗りの土引戸



二階正面の建具  
嵌め殺し鉄製格子組窓



二階階段入口開口部  
縦板張りの板戸

## 第2節 痕跡調査

腰廻りのモルタル基礎の埋め込み型枠として施された堰板には、「昭和35年11月5日」と記された新聞紙が貼られていた。これにより腰廻りのモルタル基礎は、土壁下部を切断した設えからも後補と考えられるが、堰板に貼られた新聞紙より昭和35年以降の改修と考えられる。下屋庇の垂木掛けを受ける支柱は腰廻りのモルタルに立っていることから下屋庇の改修も昭和35年以降に行われたと考えられる。

洋釘が多く用いられていたが、角釘（和釘）は柱間に挟まれた内壁や桁から棟梁にかかる約60mm厚の天井板で用いられていた。

## 第3節 墨書調査

土蔵の「ほ一」の方立には、北面には御守りが貼られており、南面には土蔵の建築年代が分かる墨書があった。上段には「天保十五甲辰年 正月良辰建築」、下段には「明治廿有七甲午年 孟春再繕」と記されていた。

天保15年（1844）正月吉日に建築したと、50年後の明治27年（1894）の旧暦1月に修築したことが分かる資料である。

また、箱棟の棟木には修理の年代が分かる棟札が取付けてあった。上段は「明治三十五年十二月良辰 葺之 笹野雛藏」、下段は「大工 石井佐吉 武力師 田中駒次郎」と記されていた。明治35年に屋根の葺き替えたことと大工や武力師（ブリキ師=板金職人）が分かる資料である。

これらの墨書きと棟札から旧笹野家住宅の土蔵が、天保15年に建築、明治27年に修築、明治35年に屋根の葺き替えをしたことが判明した。



「ほ一」方立に記された年代の分かる墨書



年代の分かる墨書部材の位置



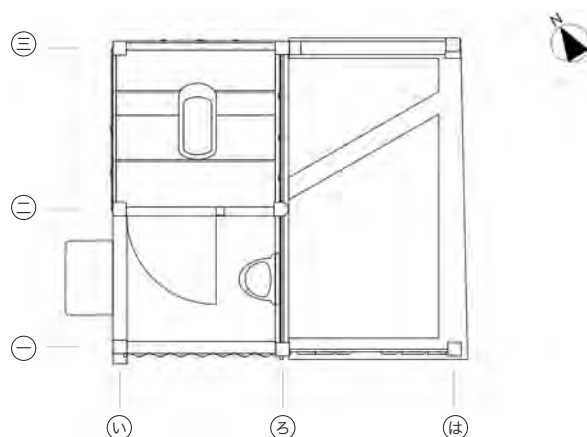
置き屋根の箱棟に張付けてあった墨書

## 第5章 外便所

### 第1節 形式・技法の調査

#### (1) 柱間・計画寸法

垂木割は455mmであったことから、910mmを3尺として基準としていた。小便器のある西面の出入口の柱間は910mmの3尺、奥行きおよび和式便器のある柱間は1060mmの3.5尺、背面東側の便槽の奥行きは1128mmの3.7尺であった。



第4図 外便所の番付平面図

#### (2) 基礎

基礎はコンクリートの布基礎であり、東面側の便槽と一体の造りとなっていた。便槽側の東面の柱のホゾ穴が加工されている。

#### (3) 軸部

コンクリート基礎の上に土台が敷かれ、その上に柱が立っていた。東面の便槽側はコンクリート基礎の上に直接、柱が立っていた。中央に東立てをした和小屋構造ではあるが、東側の便槽側と西側の便所側では、構造が異なっていた。東側の便槽側は小屋梁の上に桁がのる折置組で、西側の便所側は桁の上に小屋梁がのる京呂組であり、小屋梁によって軒桁を支える構造であった。

便槽と便所側では架構や桁の寸法も異なり、本来であれば1本もので計画する柱間ではあるが、便所側の小屋梁を便槽側の中央で継いでいることから、便槽を整備した時に、屋根および小屋組を増築などの改造をしたと考えられる。



解体中の軸部 北東から

#### (4) 造作

南面の外壁は波板亜鉛鉄板張り、西面と北面は目板を施した杉の縦板張り、東面は腰上を小舞下地の土壁塗りとし腰部は杉の縦板張りであった。土壁の小舞下地は30mmピッチで格子状にワラ縄で組まれ、40mm厚の荒壁仕上げであった。



小便器のある室の東面と南面の内壁は、腰上を小舞下地の土壁塗りとし腰部は杉の縦板張りであった。開き扉脇の北面の袖壁は破損し外れていたが縦板張りであった。和式便器のある室は、東面は目板を施した杉の縦板張り、北面、西面は外壁の縦板張りの裏面の表しで、開き扉脇の南面の袖壁は、小便器のある室側の縦板張りの裏面が表しとなった仕上げであった。

床板は、和式便器のある室に張られており、根太掛けによる根太組みが施されてあった。床板は根太が水平ではなく勾配がついており、後補の仕事であったと考えられる。小便器のある室は、床板はなく土のままの仕上げであった。

和式便器は茶色の陶器の和便器が設置してあった。家畜小屋には白の陶磁器に青で紋様が施された和便器も保管されていた。小便器は「Nishiura」のメーカー名が記されており、昭和10年創業の西浦製陶株式会社（現ジャニス工業株式会社）の製品であることがわかった。



陶器製の小便器

## (5) 屋根

屋根は垂木に栈木を打ち込み、波板鉄板（トタン）葺き仕上げであった。

## (6) 建具

建具は、小便器のある室と和式便器のある室との境に開き扉が設置されていた。堅框の先端とそれに対応する鴨居は円形に加工されており、扉が回転できる仕組みであり、金物等を用いない木製開戸であった。

## 第2節 痕跡調査

和式便器のある室と小便器のある室境の袖壁の東側の柱には小舞穴と貫穴があり、土壁の跡があり、袖壁は縦板仕上げではなく当初は土壁が施されていたとも考えられる。

東面の和式便器のある室の外壁の腰板壁には小便器の高さ付近と考えられる箇所に円形の穴があけられている。小便器の設置は当て板などの仕事から後補であると考えられる。和式便器の床根太が水平でなく床板に勾配が生じている造りである為、こちらも後補の仕事と考えられる。これらの痕跡から便器の種類や位置は改造等を重ねてきたと推定できる。



壁材撤去後 北から



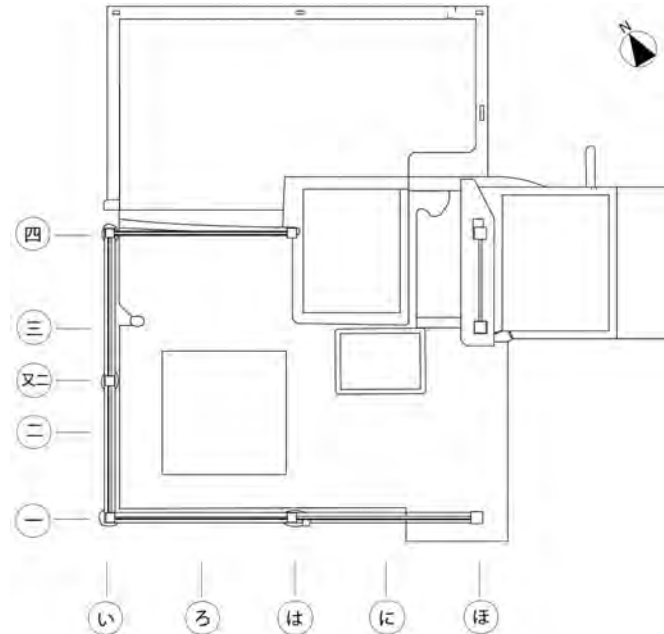
部材調査 南から

## 第6章 井戸上屋

### 第1節 形式・技法の調査

#### (1) 柱間・計画寸法

井戸上屋も垂木割は455mmであったことから、910mmを3尺として基準としていた。倒壊し部材が破損していた為、正確ではないが垂木割から桁行は2879mmの9.5尺、梁行は3636mmの2間であると考えられる。



第5図 井戸上屋の番付平面図

#### (2) 基礎

南面と西面の土台下には土に埋もれた礎石があった。北面と東面はモルタルの流しの立上がり部に柱が立てられていた。井戸枠もモルタルであり、床もモルタル土間であった。

#### (3) 軸部

南面と西面には土台があり、柱はその上に立ち、北面と東面の柱はモルタルの流しの立ち上がりの上に柱が立っていた。南面と北面の妻面は登り梁の叉首構造で棟木を支える構造であり、西面と東面では桁を二重にして東西方向の初重梁を挟みこむ構造であった。初重梁の上の栗材の二重梁の元と末の端部は柱が受けていた。井戸上屋の中央では二重梁の上に東立され登り梁を受ける。

#### (4) 造作

南面の外壁は縦板張り仕上げであったことは分かった。内外の造作については、井戸上屋が倒壊していない時期の写真から造作が確認できた。これによると北面外壁の西側は下見板張りであり、その内側となる内壁は縦板張りであったことが分かる。また西面外壁の北側は縦板張り、西面外壁の南側半分は波板トタン張りであったことが分かる。内部の南西側には造付の戸棚が設置されていたことも分かった。井戸には手押しポンプと電動ポンプが備えられていた。

#### (5) 屋根

屋根は波板鉄板葺きで、南西側は大波（波幅80mm）の波板トタンでそれ以外は小波（波幅30mmと42mm）の波板トタンであった。3種類の波板トタンで葺かれていることから、過去に葺替えを行っていたと推定できる。



外観 南東から 平成 25 年撮影



内部 南東から 平成 25 年撮影



解体前の状況 南東から



部材調査 南から

## 第 2 節 痕跡調査

井戸上屋は土や落ち葉等が堆積していたが清掃することで、モルタルにより施工された流しがあらわになった。井戸上屋の内部には 2 つの大小の流しがあり、井戸上屋の東側と北側にも流しがあった。大小 2 つの内部の流しには北側の流しへ排水できるように水抜き穴が施されていた。洗うものなどによって、複数の流しを使い分けていたと考えられる。内部の流しにはとうもろこしの芯があり、内部の流しでは野菜等を洗うなどしていたと推定される。

板金を筒状に丸めたパイプが残置しており、ポンプ式の井戸につないで組み上げた水を各流し等へ配水していたと考えられる。



解体中の井戸 南西から



モルタル流し 南から

## 第7章 まとめ

### 第1節 土蔵

旧笹野家住宅の土蔵は、主屋西側に建ち、土蔵造二階建、切妻造平入、波形鉄板葺き置き屋根の構造形式で、小屋組は両妻梁が棟木を受ける構造であった。規模は一階二階ともに、桁行 6138mm、梁行 4092mm である。墨書と棟札より建築年代と修理および屋根葺替えの履歴が分かった（以下表参照）。

年代	内容	墨書や棟札
天保 15 年 (1844)	建築	方立の墨書「天保十五甲辰年 正月良辰建築」より
明治 27 年 (1894)	修築 (修理)	方立の墨書「明治廿有七甲午年 孟春再繕」より
明治 35 年 (1902)	屋根葺替え	箱棟内棟札「明治三十五年十二月良辰 葺之 笹野雛藏」 「大工 石井佐吉 武力師 田中駒次郎」より

建築年代は江戸時代であり、天保の飢饉後の天保 15 年 (1844) の建築で 180 年前に建築されたものである。その後、建築されてから 50 年後となる明治 27 年 (1894) に修理がされ、明治 35 年 (1902) には屋根葺替えが行われた。その葺替え年代の分かる棟札には、建築年代の他、「大工」と「武力師」の名前が記されている。「武力師」とは、ブリキ師と読むことができ、棟札の張り付けてあった屋根が波板鉄板（トタン）葺きであることから板金職人のことであると考えられる。土蔵造の主要な工種といえば、大工工事と左官工事であるが、当時としては新しい材料（ブリキ材）を扱う板金工事の職人の名が棟札に記されていることは希少であり、当時、最先端技術を有する板金職人への敬意を感じる。

解体作業時の記録調査や痕跡調査により、元々は土壁仕上げの土蔵で、桁下（鉢巻下）は下見板仕上げで、窓や出入口廻りは漆喰仕上げであったと考えられる。土蔵の南面は、当初と推定される下見板が残り、折れ釘を用いて下見板を留つけていた。この折れ釘は、他の面である北面、西面にも残されており、南面と同様に北面と西面とも下見板仕上げであったと考えられる。北面、西面、東面の波板トタンの外壁板金仕上げは、置き屋根を葺き替える時期に仕上げた造りであった為、明治 35 年 (1902) の屋根葺替えと同じ時期だと考えられる。また、東面の庇の金属板葺きも外壁の波板トタンの板金仕上げと同時期の仕事の造りとなっており、既存の化粧垂木と化粧野地板は残して、その野地板の上から垂木をながし、野地板を打ち付け波板仕上げとしていることが分かった。腰部基壇のモルタル風の仕上げも、外壁の波板トタン仕上げを施した時に施された造りと考えられる。この腰部基壇のモルタル仕上げも石灰と河原石（丸石）を混ぜて施こされた基壇であり、大正時代から昭和時代に見られる金網などの下地網はなかった。これはモルタル外壁の原形のものであり、この基壇も当時としては新しい材料であったと考えられる。外壁の板金は亜鉛鉄板で素地は銀色であるが、これを白く塗装して漆喰仕上げのように見せていることも特徴的である。一方、置き屋根と庇の鉄板（トタン）葺きは、素地のままの銀色であった。



土蔵 解体前 東面 東から



土蔵 解体前 南面 南西から



土蔵 西面 折れ釘 西から



土蔵 腰部基壇 解体

解体作業で出てきた保管物は、大貫英明氏によると、教科書の他、地主農家の経営に関する仕事上の資料が多く、これらの書類等が土蔵に所蔵されていたことが分かった（大貫 2024）。農機具や普段使う生活道具を所有する道具蔵や穀蔵とは異なる。書齋として使っていた式台玄関の近くにあった土蔵であったこともあり、土蔵が笹野家の文庫蔵としての役割を担っていたと考えられる。

書籍や書類を保管する為に、防火対策として外壁は土壁塗りが施され、窓や開口部には土塗り下地漆喰仕上げの防火扉が設けてあった。一階の漆喰塗りの観音開き扉の内側には3溝の引戸からなる漆喰塗りの土引戸、通風をとることができる腰部鉄張りの鍵付き格子戸、腰板障子戸であり、通気や防犯面でも工夫された造りであった。格子戸は、腰部は鉄張りで下端には、菊をモチーフにしたと思しき文様が施されていた。二階の窓の防火扉はさらに板金仕上げが施され、内側は2溝の引戸である漆喰塗りの土引戸、鉄製格子組に亀甲金網を張った嵌め殺し格子の窓となっていた。書物を保管する土蔵の建物の構造の特徴としては、曲がったものも用いたケヤキの柱と、その曲がった柱に合わせて厚さ60mmの板を柱の間に入れ込む。土蔵造であるが、厚板を柱の間に挟み込む現代の構造補強に通じる工法であり、強度の高い壁構造であった。ただ、小屋組は、登り梁や和小屋を組まず、妻梁で棟木（牛梁）を支え、桁と棟木には垂木や母屋を設けず厚さ60mmの野地板を載せて、その上に土壁下地塗り・中塗り・漆喰仕上げとした構造であった。当初の置き屋根は板葺か瓦葺きか草葺きかは調査では不明であったが、明治35年（1902）では、箱棟に打付けてあった棟札より波板鉄板（トタン）葺き仕上げであったと考えられる。一階の床は、根太を等間隔にはいれずランダムに入れるなどし、礎石は2段に重ねるなど高さを調整する納まりであり、建築後に改造して床を設けたと考えられる。二階の床は、床梁と厚み60mmある板壁が床を受ける構造となっていた。一階の内部の壁は、板壁と柱の上から横板張りであったがこれは造り付けの押入の背板と考えられる。二階は厚み15mmの縦板張りとし、物が壁にぶつからないように工夫されていた。



土蔵内に残されていた紙資料 1



土蔵内に残されていた紙資料 2

防火性が高く、通風も取れる造りで、壁の強度が強いが、劣化と破損が進んだ。暴風等により、置き屋根がずれ動いてしまったと考えられる。置き屋根が波板鉄板（トタン）葺きで軽かったことも要因である。ずれ動いた箇所から雨水が浸入し、棟木と妻梁の仕口部分に腐りが生じていた。その為、厚さ 60mm の野地板の上から土塗り下地漆喰仕上げとする屋根面を支えていた棟木が落下したと考えられる。解体調査時は棟木が落下した状態であったが、強度のある壁の造りであった為、壁や柱が倒壊することがなかった。

旧笹野家住宅の土蔵は、火災や地震から、家財（書類）を守る頑強な構造であり、明治時代の当時では新しい材料であったブリキ板を外壁や屋根に積極的に用いており、修繕技術も特徴的な土蔵であった。

## 第2節 外便所

旧笹野家住宅の外便所は、敷地北東側に建ち、構造形式は木造平屋建、切妻造、波形鉄板葺きである。規模は桁行 1974mm、梁行 2208mm であった。建物に入って正面に小便器が置かれた室、左側には和室便器が置かれた室があり、それらの背面（東面側）にコンクリート製の便槽が置かれた室が配されていた。

主屋の東側は農作業小屋が北から家畜小屋、機械小屋、穀蔵（現存せず）と並んでおり、肥溜を設けた便所はこれらの並びに位置していた。建築年代は洋釘の使用や便所のロゴなどから昭和時代の初期頃の建築ではないかと考えられる。

小屋組は、中央に束立てをした和小屋構造であるが、便所側は桁の上に小屋梁がのる京呂組で、便槽側は小屋梁の上に桁がのる折置組となっており、便所側と便槽側で構造が異なる。このように、便所側と便槽側で架構や桁寸法が異なること、便所側の小屋梁を便槽側の中央で繋いでいることから、コンクリート製の便槽を整備した際、増築等の改造を屋根および小屋組に施したと考えられる。この増築は、建物に大きく手をいれず解体せずに行った造りでもあった。

旧笹野家住宅の外便所は当時の大工の増築の工夫が見ることができ、井戸上屋とともに昭和時代の笹野家の暮らしの変遷が伺うことが分かる建物としても貴重であった。



外便所 屋根裏



外便所 外観 南から

## 第3節 井戸上屋

旧笹野家住宅の井戸上屋は、主屋北東側に建ち、構造形式は木造平屋建、切妻造、波形鉄板葺きである。倒壊していた為、正確ではないが、垂木割によれば規模は、桁行 2825mm、梁行 3680mm であると考えられる。解体調査を行ったが建築年代は不明であるが、洋釘を用いており昭和時代ではないかと考えられる。

主屋の間取りの北東側には炊事場と炊き口のある風呂場があり、井戸上屋と主屋北東側は家事の場であったと考えられる。井戸上屋には4つの流しがあった。推測ではあるが野菜などの食材を洗い場、洗濯を行う洗い場、家畜などを洗う場、農機具などの道具類を洗う場として流しを使い分けていたと考えられる。上屋内部には手押しポンプと電動ポンプを付けた井戸がある。樋を加工したと考えられる板金材も井戸上屋の解体現場には残置されており、ポンプ式の手押しポンプに接続して、各流しへ配水していたと考えられ、流しの付近には、

水瓶や桶、スノコ台もあった。また、電動ポンプも使われており、昭和16年（1941）に市に寄贈する前の最後の所有者であった笹野ハル氏が嫁いできたときに設置したものと言われ（大野2013）、隣接する主屋の流しへ樋を加工した板金材で送水していたと考えられる。4つの流しには、上下の区別も行われていたと考えられ、北側の流しは最下流となっており、北側斜面下となる鳩川へ流れるように水抜き穴としての排水路も見られた。この北側の最下流の流しは道具類や家畜などを洗う場所であったと考えられる。井戸の脇にある2つの流しは、北側の流しへ排水するようになっており、ここでは野菜や食器などを洗っていたと考えられ、そのうちの1つにはスノコが置かれていたことが倒壊する前の写真より分かった。流し付近にはとうもろこしなども見つかったこともあり、ただの水屋ではなく食べ物の下こしらえや保存食の加工場としても使われていたと推定できる。また、調理で使ったか暖をとる為に使われたか定かではないが板金製の火鉢も発見された。おそらく風呂の炊口が近くにある為、風呂吹き用の薪や炭を用いて火鉢を使っていたと考えられる。

建築的特徴としては、南面・北面の妻面は登り梁の叉首構造で棟木を支える構造であり、初重梁の末口（木材の根元から遠い細い端部）は西面の柱で受け、初重梁の元口（木材の根元に近い太く、荷重のある端部）を受ける東面では二重桁とし、東西方向の初重梁を挟み込んでいた。初重梁の上に南北方向に栗材の梁を受け、井戸の上には西側桁と栗材の梁との間に繋ぎ梁を渡していた。この繋ぎ梁は、井戸の真上にある為、滑車や釣瓶を受けていたと考えられる。妻面の登梁にかかる母屋は刻み加工されておらず、かませ材で母屋を受ける技法も特徴的であり、素早くつくった井戸上屋であると考えられるが、単純な左右対照の架構とせず、部材の受ける重さによって架構を工夫していたことが分かった。また、倒壊する前の写真によれば、北面外壁の西側は下見板張りであり、その内側となる内壁は縦板張りであったことも確認できる。西面外壁の北側は縦板張り、西面外壁の南側半分は波板トタン張りであったことも視認でき、内部の南西側には造付の戸棚が設置されていたことも分かった。家事の場として使われていたこともあり、壁や造作は使いやすいように手元にある材料で組み合わせていき改造していったと考えられる。

一方、柱はモルタル土間の上にホゾ穴を加工して、直接建てた簡素なものであり、土がモルタル土間に堆積し、根元から柱が腐っていった。東側は、モルタルの立ち上がり基礎であるが柱脚にモルタルが埋め込む方式である為、水が入りこみ抜けきらず、柱脚の腐りが進行していた。また生活する人がいなくなり、竹が成長し、屋根を突き破るなどし、風雨にさらされ倒壊していったと考えられる。

旧笹野家住宅の井戸上屋は、架構の工夫が見られ、家事の中心であり、昭和時代の笹野家の暮らしぶりの変遷が伺うことが分かるものとしても貴重であった。



井戸上屋 外観 南から



井戸上屋 外観 南西から

#### <参考文献>

- 大野 敏 2013 『笹野家見学会資料 20130317』 横浜国立大学
- 清水 擴 2015 「第七章第三節住まい」 『相模原市史 文化遺産編』 相模原市
- 大貫英明 2023 『旧笹野家住宅を考える会 年報4』 旧笹野家住宅を考える会
- 大貫英明 2024 『旧笹野家住宅を考える会 年報5』 旧笹野家住宅を考える会

第1表 土蔵の部材リスト (1)

	分類	部材名	番付 (位置)	寸法 (mm)			樹種	備考	保存
				長さ (仕口含む)	厚さ、背 (見込)	幅 (見付)			
1	構造材	土台	ほ一〜と一	1645 (1669)	143	195	ケヤキ	良好	○
2	構造材	土台	い一〜は一	1680	145	195	ケヤキ	は一腐り	
3	構造材	土台	い五又六〜い十	3025 (3040)	145	200	ケヤキ	端部、外側面腐り	
4	構造材	土台	と十〜い十	4220	200	200	ケヤキ	西面、上部下部腐り著しい	
5	構造材	土台	い一〜と一	4346 (4386)	200	200	ケヤキ	東面下端い一側腐り著しい	
6	構造材	土台	と一〜と十	5955 (6190)	195	175	ケヤキ	東面外側上下端腐り著しい	
7	構造材	土台	い一〜い十	6370	195	200	ケヤキ	北面外側上下端腐り著しい	
8	構造材	土台	と十〜い十	3455 (3635)	150	200	ケヤキ	西面側面下端腐り著しい	
9	構造材	土台	と十〜と五	3490 (3528)	140	195	ケヤキ	南面側面、下端腐り著しい	
10	構造材	土台	と十〜へ十	630 (845)	145	195	ケヤキ	西側面、下端腐り著しい	
11	構造材	土台	と一〜と五	2620 (2960)	145	200	ケヤキ	南面側面、下端腐り著しい	
12	構造材	土台	い一〜い五又	3085 (3425)	145	195	ケヤキ	下端腐り著しい	
13	構造材	大引	い六一〜い四	2080	126	178	ヒノキ	腐食、欠損著しい	
14	構造材	柱	い一	4448	190	165	ケヤキ	柱頭、柱頭欠損、腐食著しい	
15	構造材	柱	い二	4455	160	170	ケヤキ	柱脚腐食、欠損著しい	
16	構造材	柱	い三	4390	180	145	ヒノキ	保存	○
17	構造材	柱	い四	4438	166	172	ケヤキ	保存	○
18	構造材	柱	い五	4430	114	140	ケヤキ	保存	○
19	構造材	柱	い六	4410	155	148	ヒノキ	保存	○
20	構造材	柱	い七	4410	160	185	ケヤキ	保存	○
21	構造材	柱	い八	4410	150	110	ケヤキ	保存	○
22	構造材	柱	い九	4445	140	145	ヒノキ	保存	○
23	構造材	柱	い十	4254	150	174	ケヤキ	全体欠損	
24	構造材	柱	ろ一	4890	126	115	ケヤキ	保存	○
25	構造材	柱	ろ十	4910	140	130	ケヤキ	保存	○
26	構造材	柱	は一	5290	135	148	ケヤキ	保存	○
27	構造材	柱	は十	5250	150	150	ケヤキ	保存	○
28	構造材	柱	に十	4975	120	135	ケヤキ	保存	○
29	構造材	柱	ほ一	5290	143	146	ケヤキ	保存	○
30	構造材	柱	ほ十	5335	150	150	ケヤキ	保存	○
31	構造材	柱	へ一	4920	110	130	ケヤキ	保存	○
32	構造材	柱	へ十	4845	160	140	ケヤキ	保存	○
33	構造材	柱	と一	4440	150	110	ケヤキ	保存	○
34	構造材	柱	と二	4440	135	130	ケヤキ	保存	○
35	構造材	柱	と三	4390	150	148	ヒノキ	保存	○
36	構造材	柱	と四	4440	155	180	ケヤキ	保存	○
37	構造材	柱	と五	4428	135	130	ケヤキ	保存	○
38	構造材	柱	と六	4395	136	148	ヒノキ	保存	○
39	構造材	柱	と七	4433	130	135	ケヤキ	保存	○
40	構造材	柱	と八	4418	135	133	ケヤキ	保存	○
41	構造材	柱	と九	4420	160	148	ヒノキ	保存	○
42	構造材	柱	と十	4490	160	160	ケヤキ	保存	○
43	構造材	一階扉柱	ほ又一	2390 (2549)	172	172	ヒノキ	良好、墨書あり、 「■目形式十五貫目」	○
44	構造材	一階扉柱	ろ又一	2390 (2549)	172	172	ヒノキ	良好	○
45	構造材	二階扉柱 (たて框)	は一	1440 (1514)	90	90	ヒノキ	良好	○
46	構造材	二階扉柱 (たて框)	ほ一	1440 (1514)	90	90	ヒノキ	良好、墨書あり、 上段、 「相州九沢村 藤吉様」、 下段、 「■■■■■ 越後屋 七兵衛」	○
47	構造材	一階扉、 上マグサ上段	は一〜ほ一	119	245	145	ヒノキ	良好	○
48	構造材	一階扉、 上マグサ下段	は一〜ほ一	1164 (1200)	150	120	ヒノキ	良好	○



第1表 土蔵の部材リスト (2)

	分類	部材名	番付 (位置)	寸法 (mm)			樹種	備考	保存
				長さ (仕口含む)	厚さ、背 (見込)	幅 (見付)			
49	構造材	二階扉、 上マグサ	は一〜ほ一	1360	85	90	ヒノキ	良好	○
50	構造材	二階扉、 下框	は一〜ほ一	1360	85	90	ヒノキ	良好	○
51	構造材	二階庇、 雨押え	と一〜は一	2325	66	66	スギ	腐食あり	
52	構造材	桁	い一〜い十	5450	190	140	ヒノキ	腐食著しい	
53	構造材	桁	と一〜と十	5450	190	140	ヒノキ	腐食著しい	
54	構造材	妻梁	東面	2046	280	150	ヒノキ	腐食著しい	
55	構造材	妻梁	西面	2046	280	150	ヒノキ	腐食著しい	
56	構造材	妻面又首	東面(2本)	2250	140	120	ヒノキ	腐食著しい	
57	構造材	妻面又首	西面(2本)	2250	140	120	ヒノキ	腐食著しい	
58	構造材	棟梁	に通り	5935	元口径 350、 末口径 300	-	マツ	腐食著しい	
59	構造材	二階床梁	四通り、七通り	4750 (5000)	295	145	ヒノキ	破損著しい	○
60	構造材	二階根太	ろ一〜ろ四、 他多数	1895	85	68	ヒノキ	破損著しい サンプル保存	○
61	構造材	二階根太掛け	と十	1390	60	136	ヒノキ	サンプル保存	○
62	構造材	貫	上から7、い一、 は五、北面、 他多数	3045	15	90	スギ	サンプル保存	○
63	構造材	外壁胴縁	へ十、 上から3、と十、 他多数	875	15	97	スギ	サンプル保存	○
64	構造材	外壁(腹巻部)、 下地板	い一〜と一	3690	23	37	スギ	サンプル保存	○
65	構造材	土壁、小舞竹	多数あり	-	径 33 (平均)	-	タケ	サンプル保存	○
66	構造材	置き屋根、又首	と一〜に一	3430	145	120	ケヤキ	破損あり	
67	構造材	置き屋根、又首	に一〜い一	3111 (3118)	180	115	ケヤキ	破損あり	
68	構造材	置き屋根、又首	と四〜に四	3320 (3435)	145	110	ケヤキ	破損あり	
69	構造材	置き屋根、又首	に四〜い四	3320 (3435)	145	110	ケヤキ	破損あり	
70	構造材	置き屋根、又首	と七〜に七	3320 (3435)	145	110	ケヤキ	破損あり	
71	構造材	置き屋根、又首	に七〜い七	3320 (3435)	145	110	ケヤキ	破損あり	
72	構造材	置き屋根、又首	と十〜に十	3345 (3445)	160	120	ケヤキ	破損あり	
73	構造材	置き屋根、又首	に十〜い十	3345 (3445)	160	120	ケヤキ	破損あり	
74	構造材	置き屋根、母屋	い一〜い六	4650 (4690)	95	90	スギ	破損折損多数あり、 位置は推定	
75	構造材	置き屋根、母屋	い五〜い七	1880 (2015)	100	95	スギ		
76	構造材	置き屋根、母屋	い四〜い七	3035 (3155)	100	95	スギ		
77	構造材	置き屋根、母屋	い七〜い十	2335 (2385)	100	95	スギ		
78	構造材	置き屋根、母屋	と四〜と一	2938 (3060)	105	95	スギ		
79	構造材	置き屋根、母屋	と七〜と十	3215 (3230)	105	105	スギ		
80	構造材	置き屋根、母屋	と七〜と五	2110 (2145)	100	95	スギ		
81	構造材	置き屋根、母屋	又ほ六〜又ほ一	4945 (4983)	100	95	スギ		
82	構造材	置き屋根、母屋	又ほ七〜又ほ一	5192 (5245)	90	95	スギ		
83	構造材	置き屋根、母屋	又ほ十〜又ほ七	1244	85	90	スギ		
84	構造材	置き屋根、母屋	又ろ十〜又ろ六	2538 (2615)	100	95	スギ		

第1表 土蔵の部材リスト (3)

	分類	部材名	番付 (位置)	寸法 (mm)			樹種	備考	保存
				長さ (仕口含む)	厚さ、背 (見込)	幅 (見付)			
85	構造材	置き屋根、母屋	又ろ三〜又ろ一	3260	105	95	スギ		
86	構造材	置き屋根、母屋	又ろ六〜又ろ三	3150 (3235)	105	85	スギ		
87	構造材	置き屋根、棟木	に十〜	1170 (1280)	90	90	スギ	仕口オス	
88	構造材	置き屋根、棟木	に一〜に又三	3190 (3230)	90	90	スギ	折損	
89	構造材	置き屋根、棟木	不明	2090	90	90	スギ	仕口メス、折損	
90	構造材	置き屋根、棟木	不明	1300	90	90	スギ	折損	
91	構造材	置き屋根、棟木	不明	2340	90	90	スギ	仕口メス、折損	
92	構造材	置き屋根、棟木	不明	2370 (2385)	90	90	スギ	折損、仕口メス	
93	構造材	置き屋根、棟木	不明	2060	90	90	スギ	仕口オス、折損	
94	構造材	置き屋根、垂木	東から5、他多数	3622	44	44	スギ	サンプル保存	○
95	構造材	置き屋根、棧木	西から9、他多数	3550	23	70	スギ	サンプル保存	○
96	構造材	置き屋根、 束(補強材)		202	-	径240	スギ ワラ	サンプル保存	○
97	構造材	下屋、柱	い庇	2860	-	径165	スギ	保存	○
98	構造材	下屋、柱	と庇	2860	-	径165	スギ	保存	○
99	構造材	下屋、垂木受柱	い通り	1905	80	104	スギ	保存	○
100	構造材	下屋、垂木受柱	と通り	1905	80	104	スギ	保存	○
101	構造材	下屋、軒桁		5080	径200	-	スギ	保存	○
102	構造材	下屋、垂木	い一	2140	40	33	スギ		
103	構造材	下屋、垂木	南から9	2215	52	62	スギ	サンプル保存	○
104	構造材	下屋、化粧垂木受		5080	115	115	スギ	サンプル保存	○
105	構造材	下屋、野垂木受	ほ先、い先	2068	41	36	スギ	サンプル保存	○
106	構造材	下屋、野垂木		5094	100	50	スギ		
107	構造材	下屋、広小舞		2650	33、 12	100	スギ		
108	構造材	下屋、雨押さえ		2876	20	100	スギ		
109	構造材	下屋、野地板	一通り下面 (南から3、南から2)	1765	3	311	スギ	サンプル保存	○
110	構造材	下屋、棧木	東から9、と一、 他多数	1632	25	28	スギ	サンプル保存	○
111	構造材	下屋、面戸板	南から1	272	6	88	スギ	サンプル保存	○
112	構造材	腰板 (腰部基礎型枠)	東から2	498	22	275	マツ		
113	構造材	箱棟下地側板		1835	15	270	スギ		
114	構造材	箱棟束		435	80	100	スギ		
115	構造材	箱棟木枠	1組	-	-	-	スギ	中央部に棟札あり	
116	化粧材	一階床板		1820	18	270	ケヤキ	サンプル保存	○
117	化粧材	二階床板		2060	15	240	ケヤキ	サンプル保存	○
118	化粧材	外壁下見板		1870	9	285	スギ	サンプル保存	○
119	化粧材	外壁下見板ササラコ		3170	40	50	スギ	サンプル保存	○
120	化粧材	外壁下見板幕板		2292	140	40	スギ	サンプル保存	○
121	化粧材	ハンゴ掛け		1892	78	60	スギ	サンプル保存	○
122	化粧材	一階建具、敷居		2280	120	245	ケヤキ		○
123	化粧材	一階建具、鴨居		2831	80	220	ヒノキ		○
124	化粧材	一階建具、方立	ほ一	1970	60	200	ケヤキ	墨書あり、 上段、 「天保十五甲辰年」、 「正月良辰建築」、 下段、 「明治廿有七甲午年」、 「孟春再繕」、 御嶽神社の護符あり	○
125	化粧材	一階建具、方立	い一	1934	36	160	ヒノキ		○
126	化粧材	一階建具、 漆喰引戸		1183	1930	67	土壁 漆喰 仕上	良好	○
127	化粧材	一階建具、 格子引戸		1183	1930	96	ヒノキ 鉄	良好	○
128	化粧材	一階建具、 障子引戸		1183	1930	40	ヒノキ	良好	○
129	化粧材	二階建具、敷居		1540	36	100	ヒノキ	良好	○
130	化粧材	二階建具、鴨居		1540	60	100	ケヤキ	良好	○
131	化粧材	二階建具、方立		1116	30	95	ヒノキ	良好	○
132	化粧材	二階建具、方立		1116	30	95	ヒノキ	良好	○

第1表 土蔵の部材リスト (4)

	分類	部材名	番付 (位置)	寸法 (mm)			樹種	備考	保存
				長さ (仕口含む)	厚さ、背 (見込)	幅 (見付)			
133	化粧材	二階出入口部、根太掛け	と一〜と四	1895	135	52	ヒノキ	良好、角クギ	○
134	化粧材	二階出入口部、根太掛け	と一〜い一	4175	138	75	ヒノキ	良好、角クギ	○
135	化粧材	二階出入口部、建具枠	と又二〜は又二	2006	55	70	ヒノキ	良好、角クギ	○
136	化粧材	二階出入口部、見切り板	と一〜と又二	1256	30	85	ケヤキ	良好、角クギ	○
137	化粧材	二階出入口部、見切り板	と一〜へ一	800	24	650	ケヤキ	良好、角クギ	○
138	化粧材	二階出入口部、板留め板	は一〜い一	1330	200	25	ケヤキ		
139	化粧材	二階、巾木	西と十〜と七	1945	40	125	スギ		
140	化粧材	二階、巾木	中と七〜と四	1945	40	125	スギ		
141	化粧材	天井屋根		2382	66	280	ヒノキ 上部 ヒノキ皮	一部サンプル保存	○
142	化粧材	棚、スノコ板		3580	10	80	スギ		
143	化粧材	下屋、化粧軒裏	南から 17、1 段目、上	303	6	302	スギ	一部サンプル保存	○
144	化粧材	下屋庇破風板		2358	30	315	スギ トタン	サンプル保存	○
145	化粧材	内壁一階	は十、ろ十、北から 3 東面	1930	60	246			○
146	化粧材	内壁一階	ほ十、に十、北面から 1 東面	1930	60	150			○
147	化粧材	内壁一階	ほ十、に十、北から 2 東面	1954	60	205			○
148	化粧材	内壁一階	ほ十、ろ十、北から 2 東面	1940	60	263			○
149	化粧材	内壁一階	に十、は十、北から 1 東面	1940	60	250			○
150	化粧材	内壁一階	と三、と四、東から 2 北面	1866	60	230			○
151	化粧材	内壁一階	と五、と七、東から 2 北面	1990	60	200			○
152	化粧材	内壁一階	と七、と八、東から 2 北面	1996	60	1196			○
153	化粧材	内壁一階	と十、へ十、南から 3 東面	1950	60	150			○
154	化粧材	内壁一階	東側、と四、と五、東から 3 北面	1998	60	199			○
155	化粧材	内壁一階	東側、と五、と六、東側から 2 北面	1998	60	168			○
156	化粧材	内壁一階	南側、と二、と三、東から 3 北面	1960	60	230			○
157	化粧材	内壁一階	西側、ほ十、に十、東から 3 北面	2005	60	230			○
158	化粧材	内壁一階	南側、と一、と二	1955	60	170			○
159	化粧材	内壁一階	東側、と五、と六、東側から 1 北面	1998	60	165			○
160	化粧材	内壁一階	南側、と三、と四、東側から 1 北面	1945	60	260			○
161	化粧材	内壁一階	南側、と一、と二、東から 3 北面	1955	65	204			○
162	化粧材	内壁一階	東側、と五、と七、東から 3 北面	1990	60	195			
163	化粧材	内壁一階	西側、と十、へ十、南側から 2 東面	1950	60	195			○
164	化粧材	内壁一階	東面、と九、と十、東から 3 北面	2050	62	230		欠損	○
165	化粧材	内壁一階	東側、と七、と八、東から 3 北面	2008	60	200		欠損	
166	化粧材	内壁一階	東側、へ十〜ほ十、南から 1 東面	1990	60	230			○
167	化粧材	内壁一階	西側、に十、は十、北から 2 東面	2005	60	200			○
168	化粧材	内壁一階	は十、ろ十、北から 1 東面	1925	60	210			○

第1表 土蔵の部材リスト (5)

	分類	部材名	番付 (位置)	寸法 (mm)			樹種	備考	保存
				長さ (仕口含む)	厚さ、背 (見込)	幅 (見付)			
169	化粧材	内壁一階	東側一階、と五、 と七、東から1北面	2005	60	174			○
170	化粧材	内壁一階	西側、と十、へ十、 南から1東面	1980	60	235			○
171	化粧材	内壁一階	東側、と八、と九、 東から1北面	2040	60	205			○
172	化粧材	内壁一階	東側、と四、と五、 東から1北面	2100	60	230			○
173	化粧材	内壁一階	南側、内壁、と二、 と三、東から1北面	2030	60	205			○
174	化粧材	内壁一階	他多数	-	-	-		サンプル保存	○
175	化粧材	内壁二階	東側、は一、に一、 北から1西面	453	10	285			
176	化粧材	内壁二階	東側、は一、に一、 北から2西面	455	10	282			
177	化粧材	内壁二階	東側、は一、に一、 北から3西面	453	10	273			
178	化粧材	内壁二階	東側、は一、に一、 北から4西面	452	10	277			
179	化粧材	内壁二階	東側、は一、へ一、 北から2西面	585	11	298		割れ	
180	化粧材	内壁二階	西側、は十、ろ十、 南から3東面	572	15	210		割れ	
181	化粧材	内壁二階	東、は十、ろ十、 西、一又二	518	16	32			
182	化粧材	内壁二階	西側、内壁、に十、 は十、南から3東面	590	15	171			
183	化粧材	内壁二階	東側は一、へ一、 北から1、西面	579	11	213			
184	化粧材	内壁二階	西側、は十、ろ十、 南から2東面	580	15	213			
185	化粧材	内壁二階	東側、い一、ろ二、 北から1西面	550	15	188			
186	化粧材	内壁二階	東側、内壁、と七、 と八、東から1北面	1010	15	200			
187	化粧材	内壁二階	番付なし	1172	15	205			
188	化粧材	内壁二階	南側壁板と二、 と三、東から2北面	1785	15	82			
189	化粧材	内壁二階	東側、い一、ろ二、 北から1西面	556	15	225			
190	化粧材	内壁二階	上北から一又二、 ろ一、は一	766	14	33			
191	化粧材	内壁二階	番付なし	560	14	28			
192	化粧材	内壁二階	西側、に十、は十、 南から2東面	490	17	60			
193	化粧材	内壁二階	東側二階、 仕上げ壁、 ろ一、は一、 北から2西面	1850	30	260			
194	化粧材	内壁二階	東側ろ一、は一下、 北から3西面	540	10	260			
195	化粧材	内壁二階	東側、へ一、と一、 下、北から1下西面	580	15	290			
196	化粧材		は一、に一、 北から一又二	455	12	12			
197	化粧材		番付なし	212	12	12			
198	化粧材		番付なし	922	10	12			
199	化粧材		番付なし	580	15	110			
200	棟札 ・ 木札	棟札	置き屋根、 箱棟木枠に留付	-	-	-	スギ	上段、 「明治三十五年十二月 良辰」 「葺之 笹野籬蔵」、 下段、 「大工 石井佐吉」 「武力師 田中駒次郎」	○
201	構造材	一階、根がらみ	番付なし	567	50	142	ケヤキ	サンプル保存	○
202	構造材	鉢巻下地板	番付なし	550	6	260	スギ	サンプル保存	○

第1表 土蔵の部材リスト (6)

	分類	部材名	番付 (位置)	寸法 (mm)			樹種	備考	保存
				長さ (仕口含む)	厚さ、背 (見込)	幅 (見付)			
203	構造材	腰板下地板	番付なし	494	25	274	ケヤキ	サンプル保存	○
204	構造材	二階、 庇扉エブリ板	い一、と一	1173	25	423	スギ	サンプル保存	○
205	構造材	二階、庇破風板	は一、ほ一	845	23	90	スギ	サンプル保存	○
206	構造材	二階、腕木	は一、ほ一	525	44	67	スギ	サンプル保存	○
207	構造材	二階、 庇垂木受け	ろ一、又は一、 ほ一、又へ一	2324	45	88	スギ	サンプル保存	○
208	構造材	二階、庇袖化粧	は一、ほ一	1685	53	60	スギ	サンプル保存	○
209	構造材	二階、野地板受	番付なし	853	20	254	スギ	サンプル保存	○
210	構造材	一階、兜桁下地	ろ一、ろ又は一	458	135	150	ヒノキ	サンプル保存	○
211	構造材	一階、兜桁下地	ほ又へ一、へ一	456	150	150	ヒノキ	サンプル保存	○
212	構造材	一階、兜桁下地	ろ又は一	2110	147	136	ヒノキ	サンプル保存	○

第2表 外便所の部材リスト (1)

	分類	部材名	番付 (位置)	寸法 (mm)			樹種	備考	保存
				長さ (仕口含む)	厚さ、背 (見込)	幅 (見付)			
1	構造材	土台	い一〜い三	2183	95	95	スギ	腐朽	
2	構造材	土台	ろ一〜い一	1450	100	100	スギ	腐朽	
3	構造材	土台	ろ二〜い二	1350	100	100	スギ	腐朽	
4	構造材	土台	ろ三〜ろ一	2105	135	130	スギ	腐朽	
5	構造材	土台	い二〜ろ二	1330	135	130	スギ	腐朽	○
6	構造材	柱	は一	1935	90	90	スギ	腐朽	
7	構造材	柱	は三	1825	93	90	スギ	腐朽	
8	構造材	柱	い二	1898	90	90	スギ	腐朽	○
9	構造材	柱	い一	1810	90	90	スギ	柱脚ホゾ折損	○
10	構造材	柱	ろ二	1660	95	90	スギ	柱脚ホゾ折損	
11	構造材	柱	い三	1650	85	85	スギ	柱脚ホゾ折損	
12	構造材	柱	ろ三	1710	85	90	スギ	腐朽	
13	構造材	柱	ろ一	1800	90	90	スギ	柱脚ホゾ折損、腐朽	
14	構造材	間柱	い又ろ二	1495	55	55	スギ	腐朽	
15	構造材	桁	ろ一〜い一	1450	80	85	スギ	腐朽	
16	構造材	桁	ろ一〜は一	1235	86	87	スギ	腐朽	
17	構造材	桁	い三〜ろ三	1375	85	85	スギ	腐朽	
18	構造材	桁	は三〜ろ三	1155	90	80	スギ	腐朽	
19	構造材	梁	い二〜ろ二	1425	85	85	スギ	腐朽	
20	構造材	梁	い一	1070	95	95	スギ	腐朽	
21	構造材	桁	は一〜は三	2690	90	60	スギ	腐朽	
22	構造材	桁(軒桁)	い三〜い一	2660	90	75	スギ	腐朽	
23	構造材	桁	い二〜い三	2225	100	100	スギ	腐朽	○
24	構造材	梁	ろ一〜二	1010	径90	-	スギ	腐朽	
25	構造材	梁	ろ三〜二	1050	径90	-	スギ	折損	
26	構造材	束	ろ一	496 (580)	65	25	スギ	上ホゾ、折損	
27	構造材	束	ろ二	470 (570)	75	75	スギ	腐朽	○
28	構造材	束	ろ三	484 (540)	75	75	スギ	上ホゾ、折損	
29	構造材	棟木	ろ三	1360	95	65	スギ	腐朽	
30	構造材	棟木	ろ一	1315	90	70	スギ	腐朽	
31	構造材	垂木	は一〜ろ一	1775	36	33	スギ	腐朽	
32	構造材	広小舞	西三〜一	2670	25	100	スギ	風化、廃棄	
33	構造材	広小舞	西三〜一	2670	10	100	スギ	風化、廃棄	
34	構造材	広小舞	東は一〜は二	1700	12	95	スギ	風化、廃棄	
35	構造材	屋根棧木	は三〜一	2690	12	95	スギ	風化、廃棄	
36	構造材	頭貫	ろ三〜ろ一	1950	21	95	スギ	腐朽	
37	構造材	腰貫	ろ三〜ろ一	2065	21	95	スギ	腐朽	
38	構造材	地貫	ろ三〜ろ一	1945	18	95	スギ	腐朽	
39	構造材	頭貫	い三〜ろ三	1045	20	95	スギ	サンプル保存	○
40	構造材	腰貫	い三〜ろ三	1045	20	100	スギ	腐朽	
41	構造材	地貫	い三〜ろ三	1045	20	105	スギ	腐朽	
42	構造材	頭貫	い二〜い三	1010	18	95	スギ	腐朽	
43	構造材	腰貫	い二〜い三	1000	18	100	スギ	腐朽	

第2表 外便所の部材リスト (2)

	分類	部材名	番付 (位置)	寸法 (mm)			樹種	備考	保存
				長さ (仕口含む)	厚さ、背 (見込)	幅 (見付)			
44	構造材	地貫	い二〜い三	1005	20	85	スギ	腐朽	
45	構造材	頭貫	ろ一〜い一	1045	20	100	スギ	腐朽	
46	構造材	腰貫	ろ一〜い一	1045	20	100	スギ	腐朽	
47	構造材	地貫	ろ一〜い一	1045	18	95	スギ	腐朽	
48	構造材	頭貫	は一〜ろ一	1205	15	90	スギ	腐朽	
49	構造材	腰貫	は一〜ろ一	1040	15	105	スギ	腐朽	
50	構造材	地貫	は一〜ろ一	1065	15	105	スギ	腐朽	
51	構造材	床根太	西より①	1015	60	80	スギ	腐朽	
52	構造材	床根太	西より②	1010	70	85	スギ	腐朽	
53	構造材	床根太	西より③	1015	55	75	スギ	保存	○
54	構造材	床根太	西より④	1005	70	70	スギ	腐朽	
55	構造材	根太掛け	い二〜ろ二	955	80	30	スギ	腐朽	
56	化粧材	床板	い通り、北1 ろ通り、北2	1040	12	245	スギ	腐朽	
57	化粧材	床板	い通り、北2	405	12	150	スギ	腐朽	
58	化粧材	床板	ろ通り、北2	415	12	140	スギ	腐朽	
59	化粧材	床板	い通り、北3	410	12	290	スギ	腐朽	
60	化粧材	床板	ろ通り、北3の1	405	12	300	スギ	保存	
61	化粧材	床板	い通り、 4の1、4の2	1025	12	300	スギ	腐朽	
62	化粧材	堅板	二通り (7. 1)	1433	5	295	スギ	腐朽下欠け	
63	化粧材	腰板	三通り西から 3枚目	1433	5	293	スギ	目板あり (幅30mm、厚5mm)、 腐朽	
64	化粧材	腰板	三通り南から 3枚目	928	9	290	スギ	下欠け	
65	化粧材	腰板(内側)	一通り西から 3枚目	928	9	248	スギ	腐朽	
66	化粧材	堅板(内側)	三通り西から 2枚目	1602	5	267	スギ	目板あり (幅30mm、厚5mm)、 腐朽	
67	化粧材	堅板(内側)	三通り北から 2枚目	1618	6	264	スギ	腐朽	
68	化粧材	腰板	一通り、1	928	6	140	スギ	下欠けあり	
69	化粧材	腰板	一通り、2	928	6	146	スギ	下欠けあり	
70	化粧材	腰板	一通り、3	928	6	90	スギ	下欠けあり	
71	化粧材	腰板	一通り、4	928	6	184	スギ	下欠けあり	
72	化粧材	腰板	一通り、5	928	6	172	スギ	割れ	
73	化粧材	腰板	一通り、6	928	6	134	スギ	下欠けあり	
74	化粧材	堅板見切り	柱3-付き	1642	22	35	スギ	腐朽	
75	化粧材	堅板見切り	ろ一〜ろ二	813	20	45	スギ	腐朽	
76	化粧材	堅板見切り	不明	1270	16	29	スギ	腐朽	
77	化粧材	堅板見切り	ろ二〜ろ三	992	23	48	スギ	腐朽	
78	化粧材	堅板見切り	い三〜い二	1085	10	55	スギ	腐朽	
79	化粧材	堅板笠木	い一〜ろ一	1270	20	100	スギ	腐朽	
80	化粧材	破風板	北西側	1785	15	105	スギ	腐朽	
81	化粧材	破風板	南東側	1805	15	100	スギ	腐朽	○
82	化粧材	破風板	北東面	1805	15	100	スギ	腐朽、折損	
83	化粧材	破風板	南西側	1805	15	105	スギ	垂木付き	
84	化粧材	小便器当て板		460	30	240	スギ	腐朽	
85	化粧材	棚材		980	18	100	スギ	腐朽	
86	化粧材	建具上枠(下)	い二、ろ二	975	15	75	スギ	腐朽	○
87	化粧材	建具扉		1枚	-	-	スギ		○
88	その他	和式便器	茶色陶器	1個	-	-	陶器		○
89	その他	小便器	白色陶器	1個	-	-	陶器	腐朽	○

第3表 井戸上屋の部材リスト (1)

	分類	部材名	番付 (位置)	寸法 (mm)			樹種	備考	保存
				長さ (仕口含む)	厚さ、背 (見込)	幅 (見付)			
1	構造材	土台	い一〜い四	2830 (2850)	105	105	スギ	腐朽	
2	構造材	土台	は四〜ろ四	1805 (1935)	100	100	スギ	腐朽、 は四ホゾ穴部欠失	
3	構造材	土台 (一部)	ほ一	890	95	105	スギ	腐朽、ほ一の一部のみ	
4	構造材	土台 (一部)	い一	1200	100	120	スギ	腐朽、い一の一部のみ	
5	構造材	柱	は一	1842 (1950)	95	90	スギ	腐朽	○
6	構造材	柱	ほ四	1815 (1885)	105	95	スギ	仕口部腐朽	
7	構造材	柱	は四	1890	100	100	スギ	仕口部腐朽、下部折損	
8	構造材	柱	い二〜又三	1645 (1695)	100	100	スギ	良好	○
9	構造材	柱	い四	1940 (1970)	95	95	スギ	腰貫部折損	
10	構造材	柱 (一部)	い一	950	95	95	スギ	上部のみ残存	
11	構造材	柱	は三	1750	105	105	スギ	仕口下部欠損	
12	構造材	柱	は一	1650	120	100	スギ	仕口下部欠損	
13	構造材	間柱	は東一	2020	65	65	スギ	腐朽	
14	構造材	桁一重	ほ一〜ほ四	1720 (1855)	110	-	スギ	腐朽、 折損 (三つの部材)	
15	構造材	桁一重 (一部)	ほ四	1090	120	130	スギ	腐朽、欠損	
16	構造材	桁二重 (一部)	ほ一	1820	120	120	スギ	腐朽、欠損	
17	構造材	桁 (一部)	は四	2080	105	120	スギ	腐朽、欠損	
18	構造材	桁 (一部)	い二又三	1820	120	120	スギ	腐朽、欠損	
19	構造材	桁	は四〜ほ四	1950	80	90	スギ	腐朽、欠損	
20	構造材	桁 (一部)	い一	1110	105	135	スギ	腐朽、欠損	
21	構造材	初垂梁	い二又三〜 ほ二又三	3880 (4060)	105 (ほ 二又三)、 150 (い 二又三)	130 (ほ 二又三)、 195 (い 二又三)	スギ	腐朽、欠損	
22	構造材	二重梁 (一部)	は一	1440	130	150	スギ	腐朽、欠損	
23	構造材	井戸登梁	い二〜は二	2280	径 110、 (い二)、 径 95、 (は二)	-	クリ	良好、 (井戸滑車つり用)	○
24	構造材	束 (井戸登梁)	は二	606 (945)	85	95	スギ	良好、保存	○
25	構造材	叉首 (北面)	は四〜ほ四	1870	70	65	スギ	良好、保存	○
26	構造材	叉首 (北面)	に四〜ほ四	1870	70	65	スギ	は四〜ほ四を保存す るため撤去	○
27	構造材	叉首 (南面)	ほ一〜は一	1865	70	70	スギ	は四〜ほ四を保存す るため撤去	
28	構造材	叉首 (南面)	い一〜は一	1870	70	70	スギ	は四〜ほ四を保存す るため撤去	
29	構造材	母屋 (一部)	い一	2000	80	75	スギ	欠損	
30	構造材	母屋	に通り	2835 (2850)	64	60	スギ	風化、継手あり	
31	構造材	母屋	に通り	986 (1004)	70	68	スギ	風化、継手あり	
32	構造材	母屋	ろ通り	1635 (1650)	60	60	スギ	風化	
33	構造材	母屋	は〜ほ通り	1990	80	90	スギ	風化	
34	構造材	母屋 (一部)	ほ通り (ほ一)	2100 (2150)	70	70	スギ	風化	
35	構造材	母屋	い通り	2803 (2848)	60 径 (末口)、 70 径 (元口)	-	スギ	風化	
36	構造材	母屋 (一部)	い通り (い四)	770 (815)	70	70	スギ	風化	

第3表 井戸上屋の部材リスト (2)

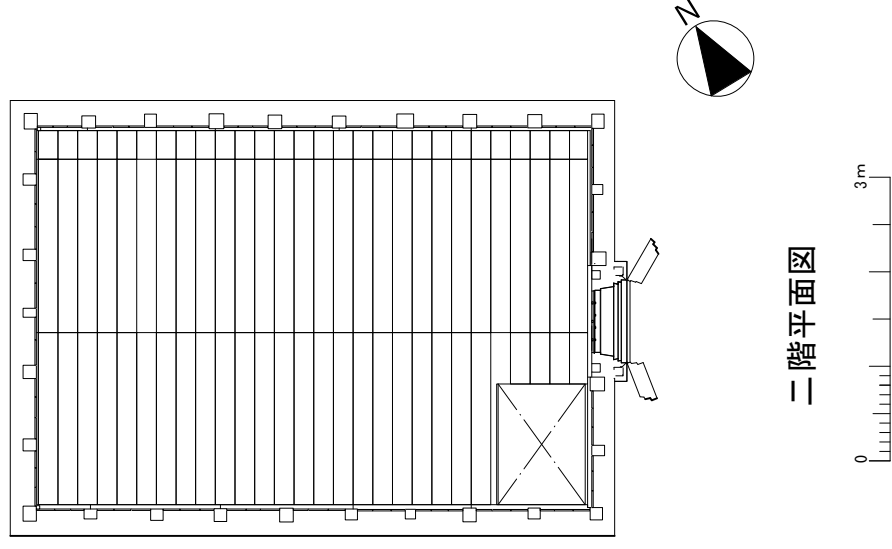
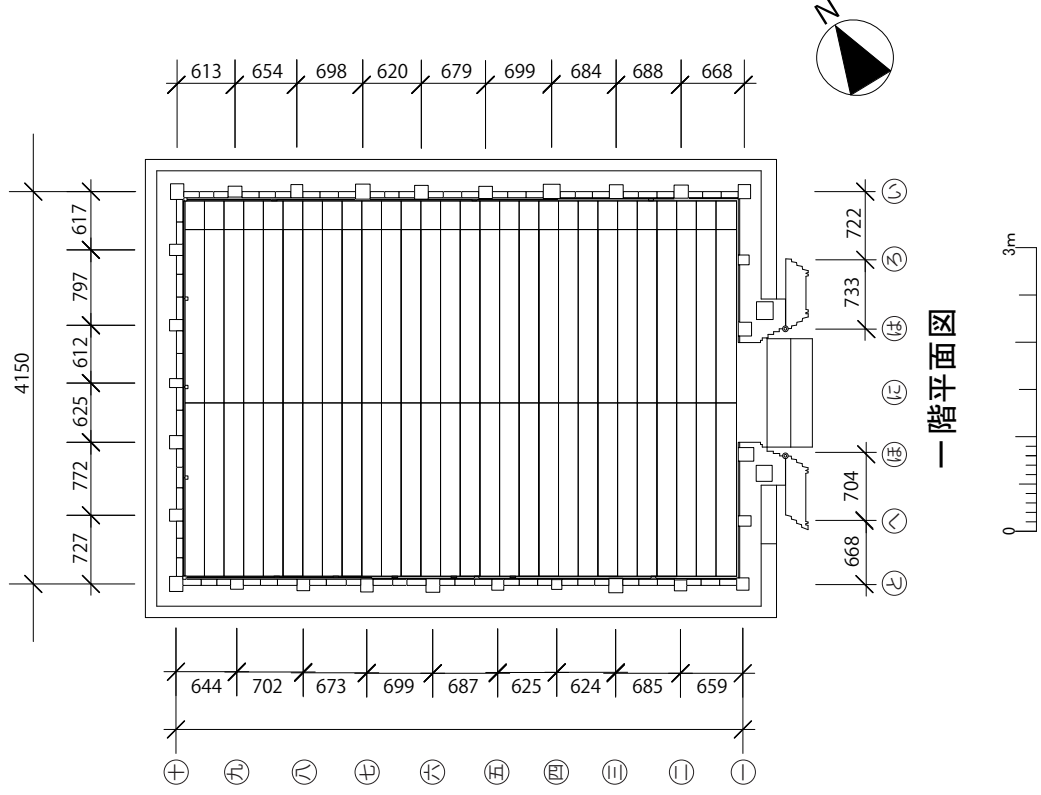
	分類	部材名	番付 (位置)	寸法 (mm)			樹種	備考	保存
				長さ (仕口含む)	厚さ、背 (見込)	幅 (見付)			
37	構造材	棟木	は通り	2865 (2910)	70角 (元口)、 60径 (末口)	-	スギ	風化	
38	構造材	垂木	一通 (い一～は一)	2586	40	40	スギ	風化、垂木合計 18 本	
39	構造材	広小舞	ほ一～ほ四	2295	105	20	スギ	腐朽、平角材 (2 枚)	
40	構造材	広小舞	い一～い四	2295	105	20	スギ	腐朽、平角材 (2 枚)	
41	構造材	棧木	い通り	2850	56	20	スギ	風化、継手あり	
42	構造材	棧木	い通り	670	56	20	スギ	風化、継手あり	
43	構造材	棧木	い通り	480	56	20	スギ	風化、継手あり	
44	構造材	棟押え	は通り	3815	20	280	スギ	風化	
45	構造材	頭貫	い一～は一	1888	18	100	スギ	風化	
46	構造材	頭貫	いニ又三～一部	1400	24	120	スギ	風化	
47	構造材	頭貫	は一～ほ一	1870	15	100	スギ	風化	
48	構造材	頭貫	いニ又三～い一	1400	24	115	スギ	風化	
49	構造材	腰貫	は一	1870	15	100	スギ	風化	
50	構造材	腰貫	は一～ほ一	1890	20	100	スギ	風化	
51	構造材	腰貫	い一～いニ又三	2930	24	110	スギ	風化	
52	構造材	地貫	は一～ほ一	1850	18	110	スギ	風化	
53	構造材	地貫	い一～は一	1866	15	95	スギ	風化	
54	構造材	地貫	い一	2275	24	118	スギ	風化	
55	構造材	貫	い通り	1856	20	110	スギ	風化	
56	構造材	貫	四通り	1786	24	115	スギ	風化	
57	構造材	貫	い通り	1870	24	115	スギ	風化	
58	構造材	貫	四通り	1866	15	95	スギ	風化	
59	化粧材	破風板 (西面)	い一～は一	2620	105	18	スギ	良好	○
60	化粧材	破風板 (西面)	は一～ほ一	2650	105	18	スギ	風化	
61	化粧材	豎板	南面	1945	9	295	スギ	風化	
62	化粧材	豎板押え	南面	1930	38	38	スギ	風化	
63	化粧材	豎板押え	南面 (い一～は一)	1682	18	100	スギ	風化	
64	化粧材	下見板ササラ子	東面 (推定)	1850	18	30	スギ	風化、3 本	
65	化粧材	屋根板板金波板	大波	1835	15 (波高)	460	ブリキ トタン	風食、 波のピッチ 80mm	
66	化粧材	屋根板板金波板	小波	1840	10 (波高)	780	ブリキ トタン	風食、 波のピッチ 30mm	
67	化粧材	屋根板板金波板	小波	805	5 (波高)	270	ブリキ トタン	風食、 波のピッチ 42mm	
68	化粧材	屋根板板金 縁見切		910	35	48	ブリキ		



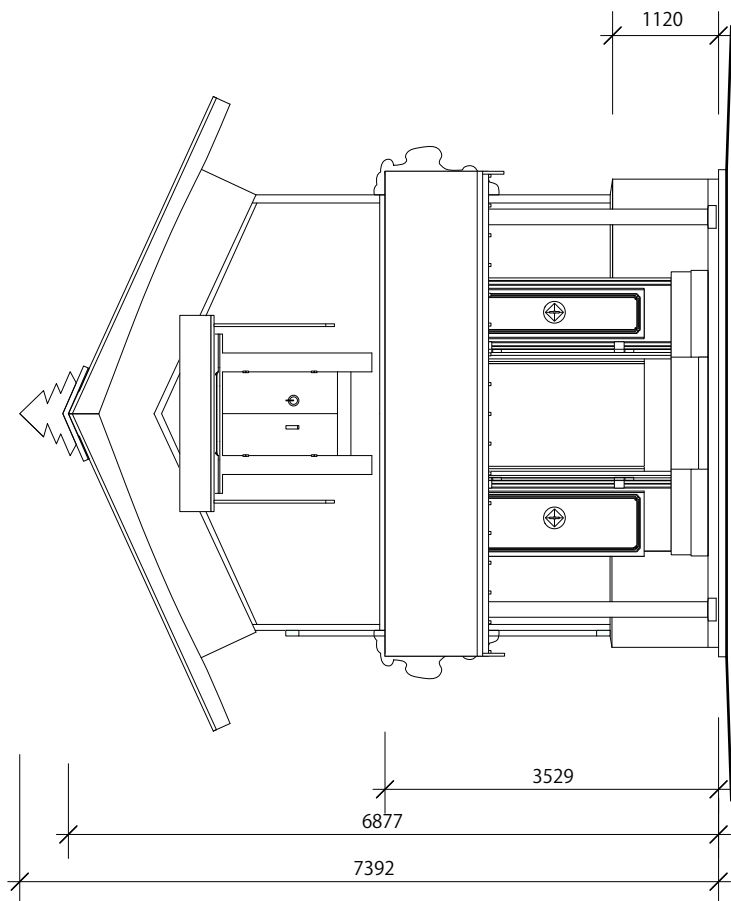
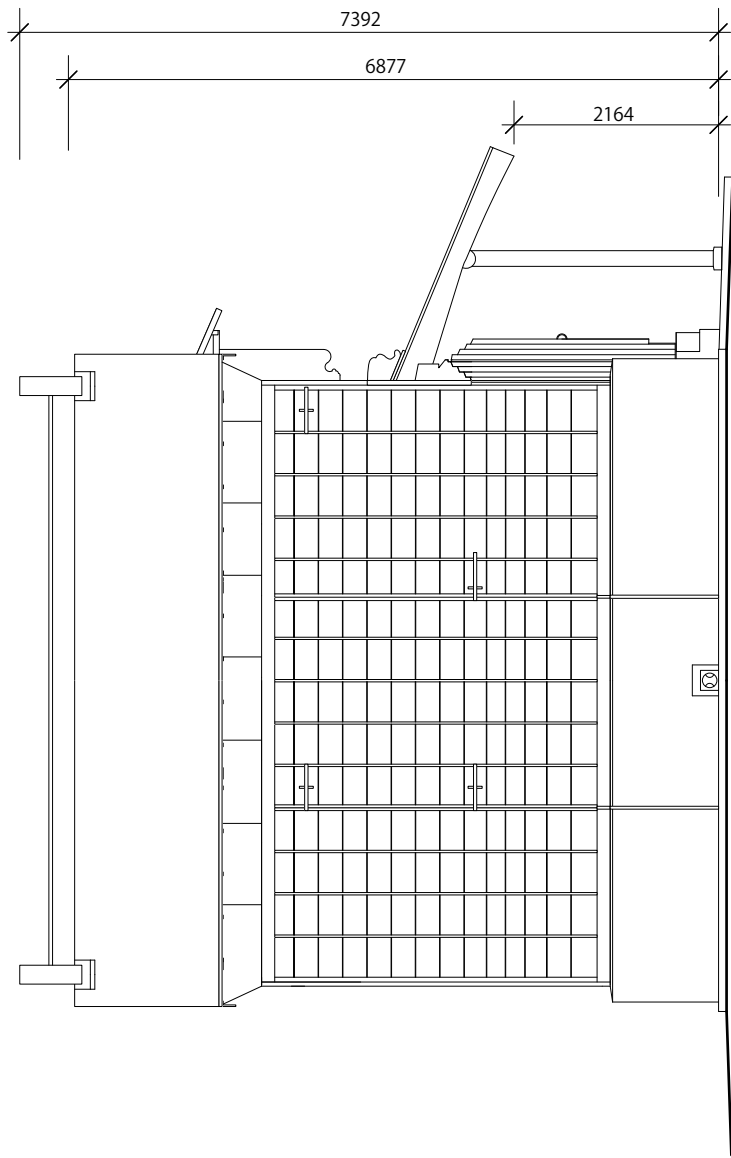
図 版

図面・写真

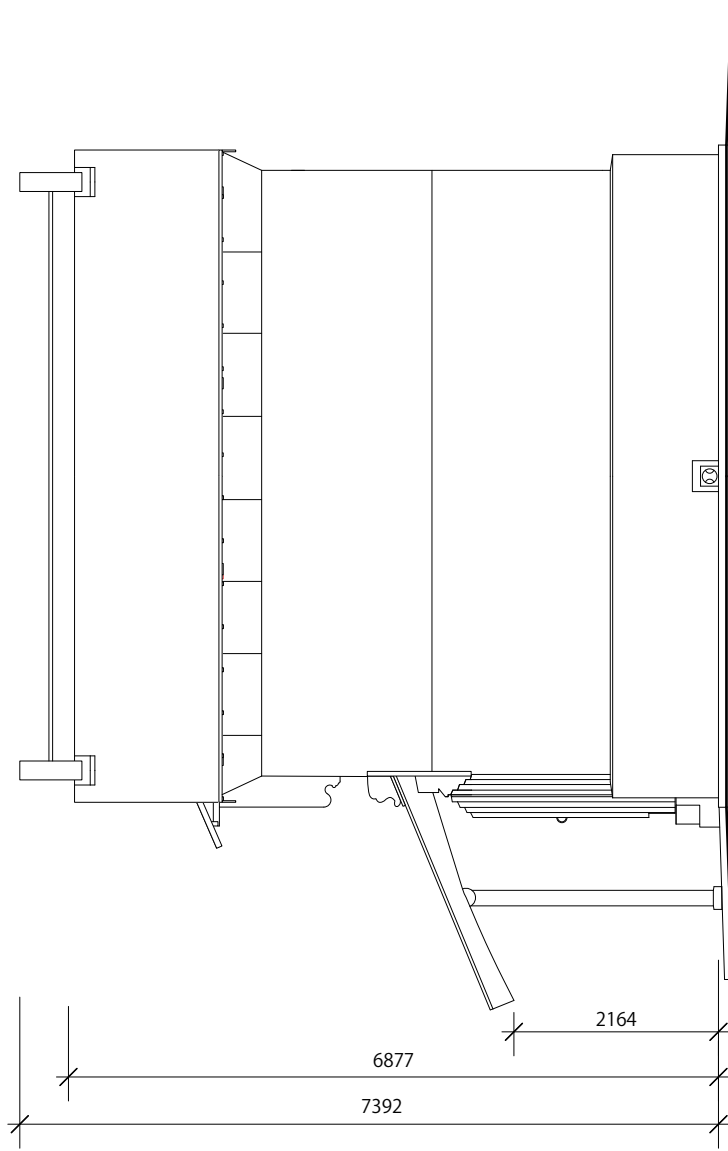




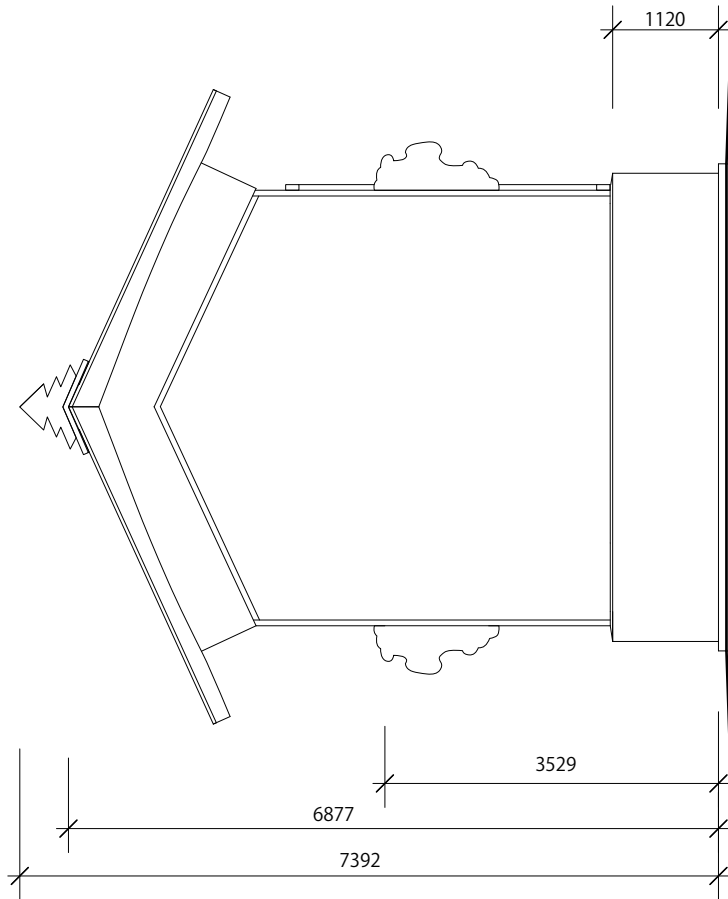
図面 1 土蔵 平面図



图面2 土蔵 立面图1



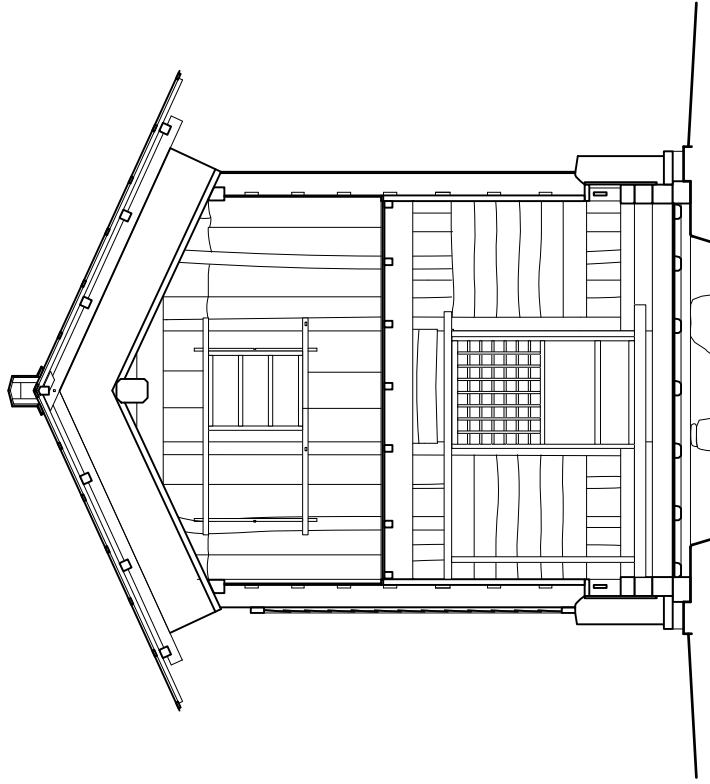
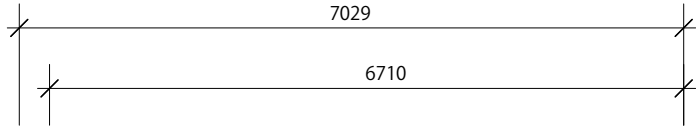
北立面图



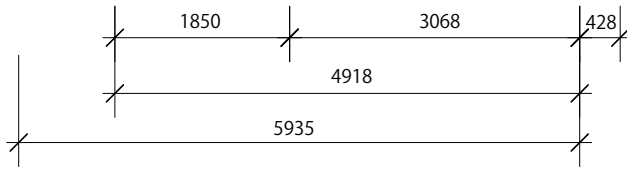
西立面图



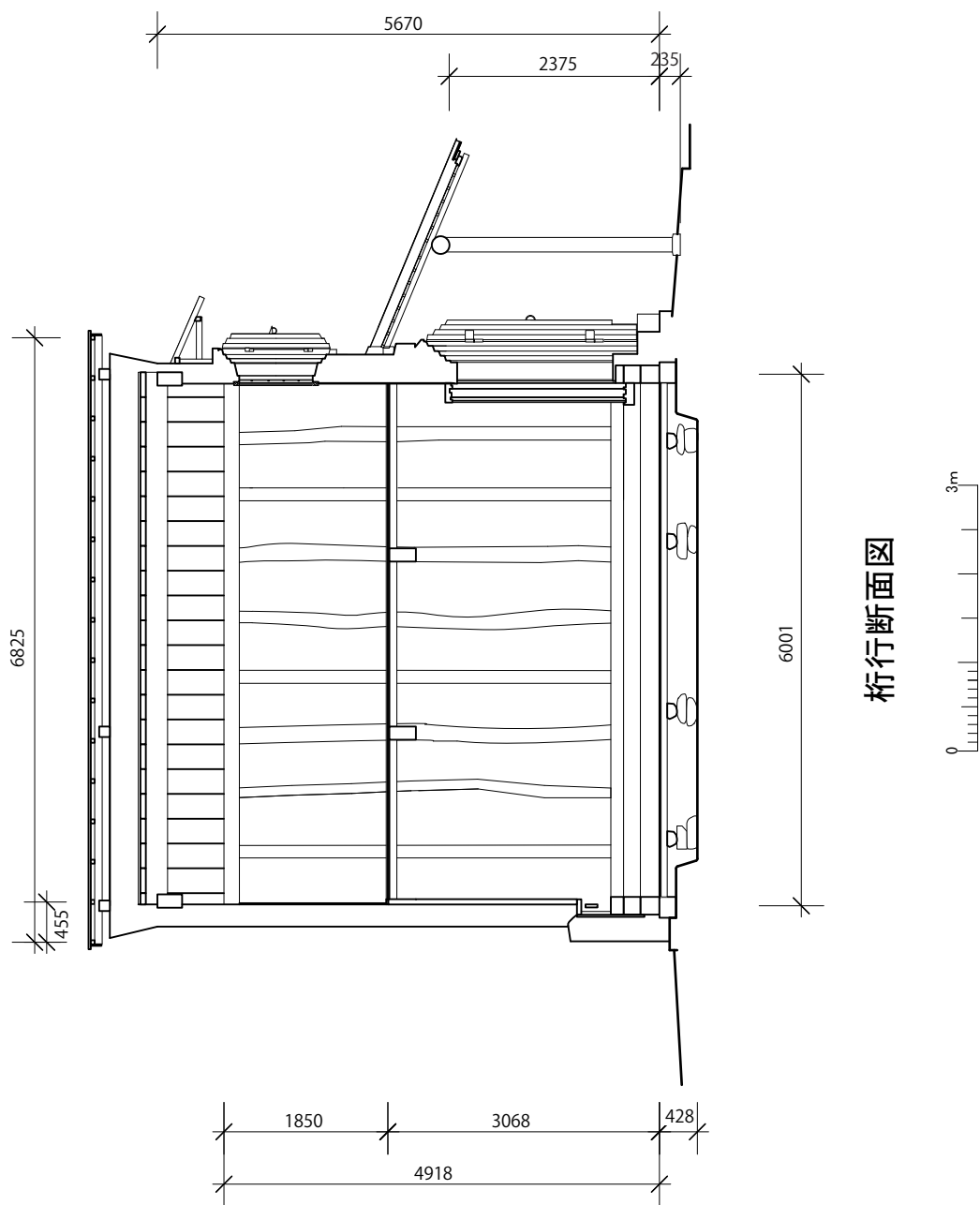
图面 3 土藏 立面图 2



梁間断面図

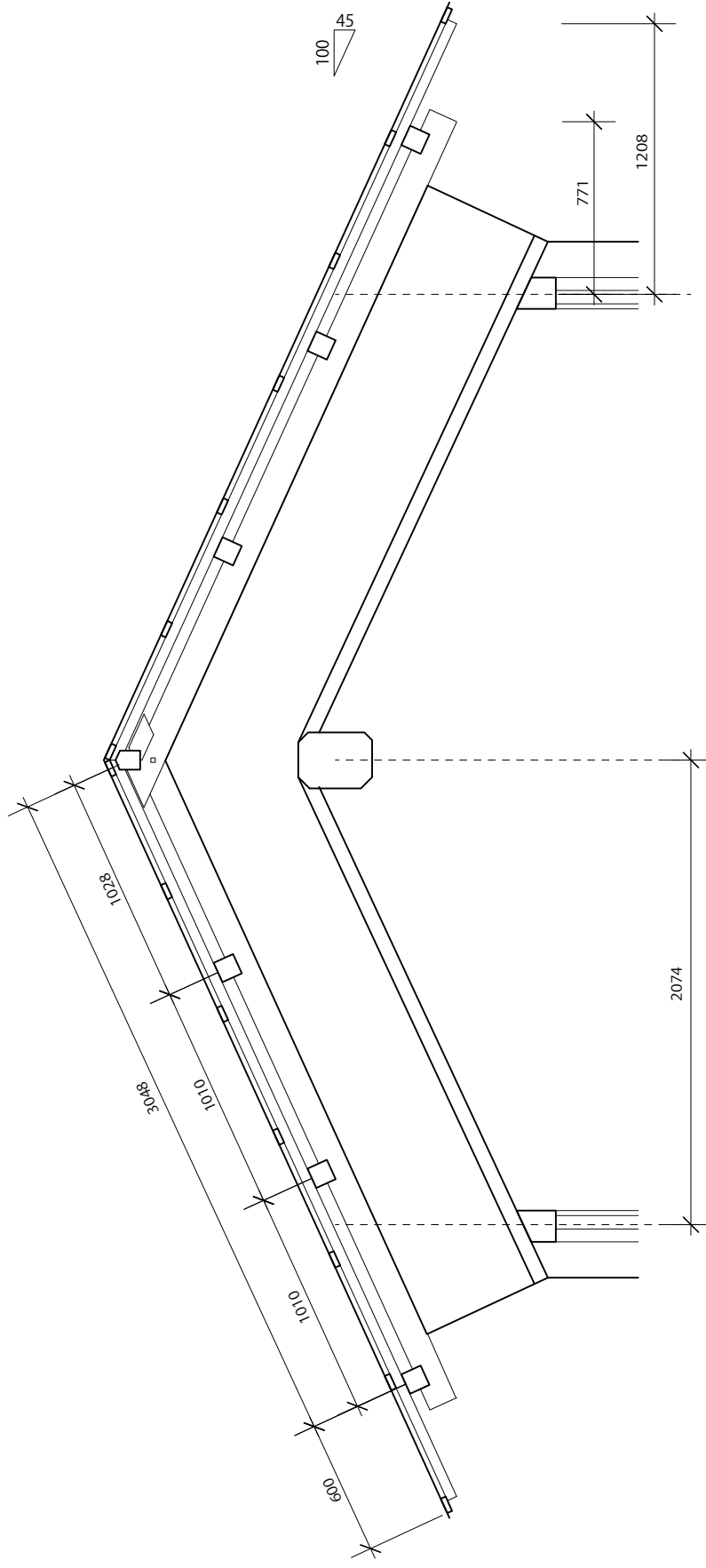


図面 4 土蔵 梁間断面図



桁行断面図

図面 5 土蔵 桁行断面図兼下屋矩計図



置き屋根根梁間詳細図



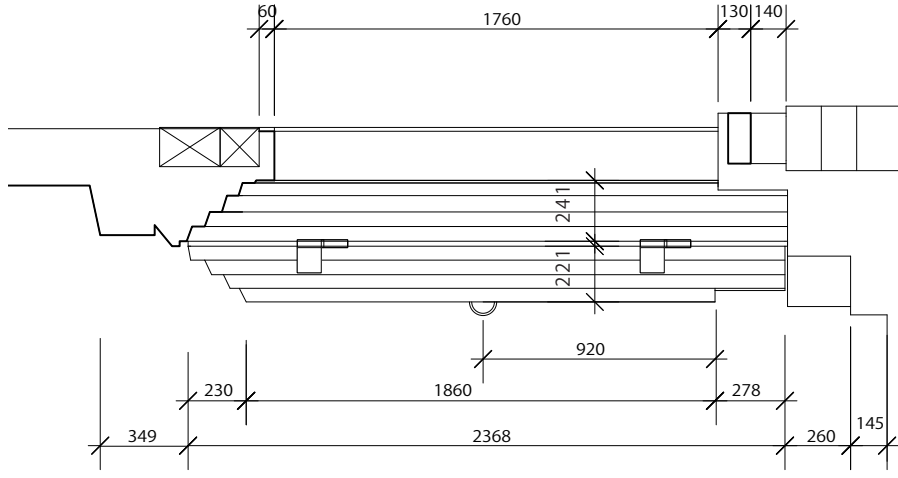
置き屋根軒先詳細図

置き屋根箱棟詳細図

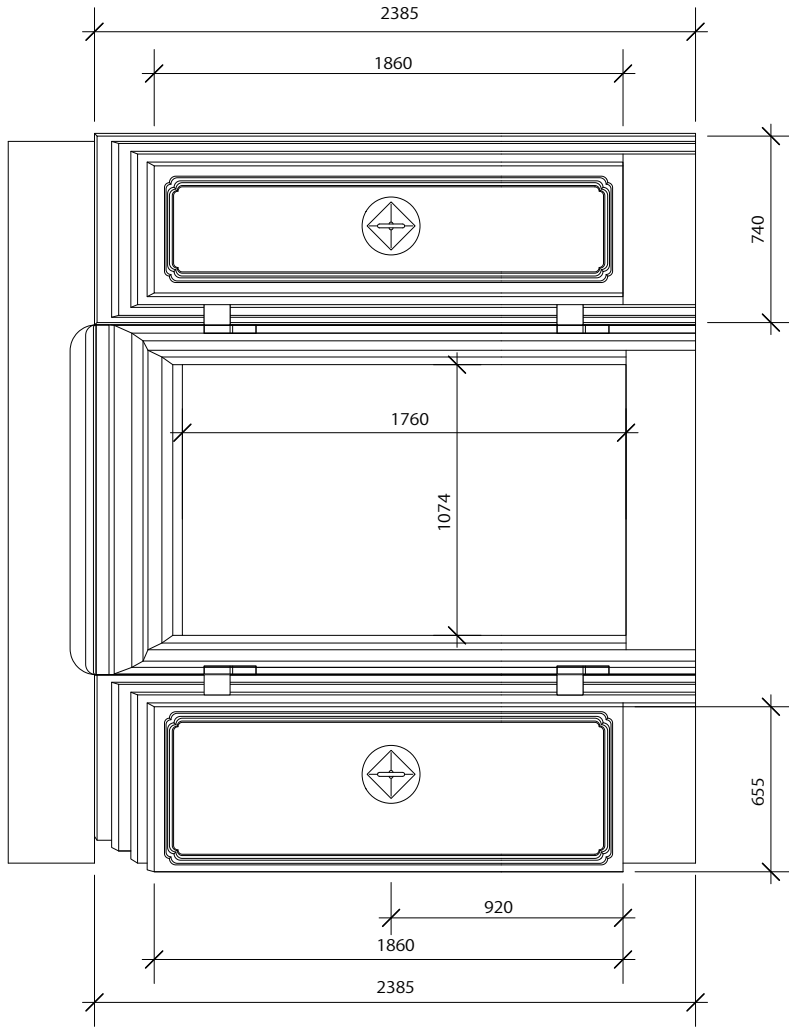


図面 6 土蔵 置き屋根詳細図



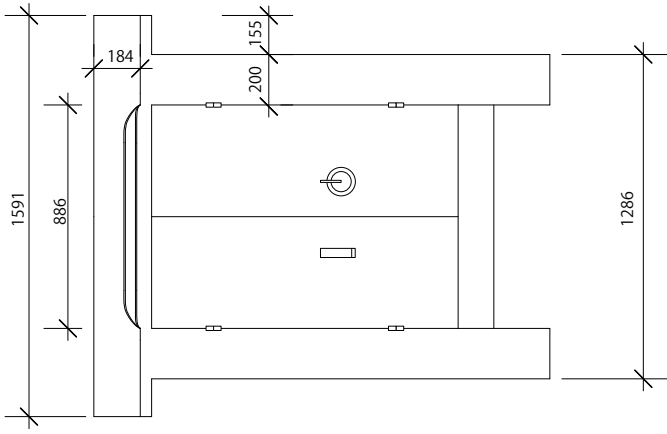


一階屏詳細断面図

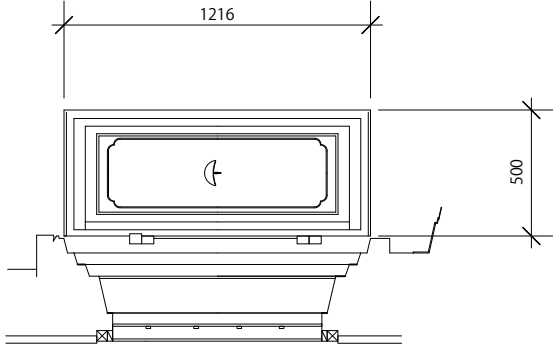
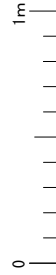


一階屏詳細立面図 (開いた状態)

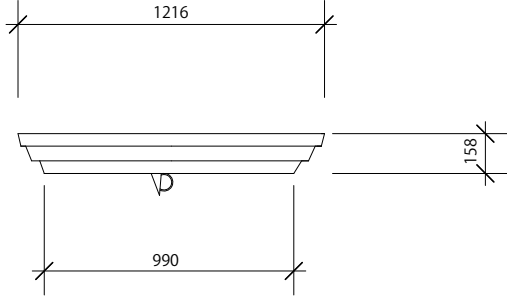
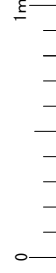




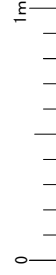
二階防火戸立面図（閉じた状態）

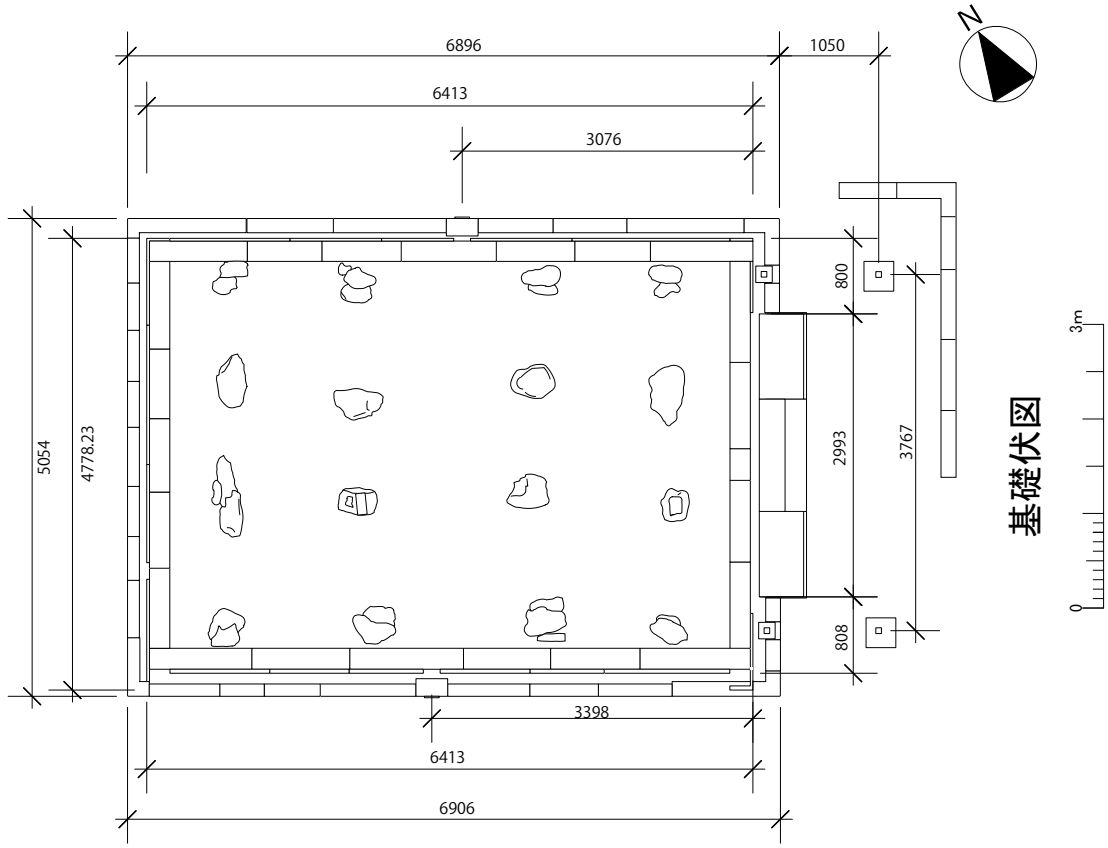


二階防火戸部分断面図  
（開いた状態）

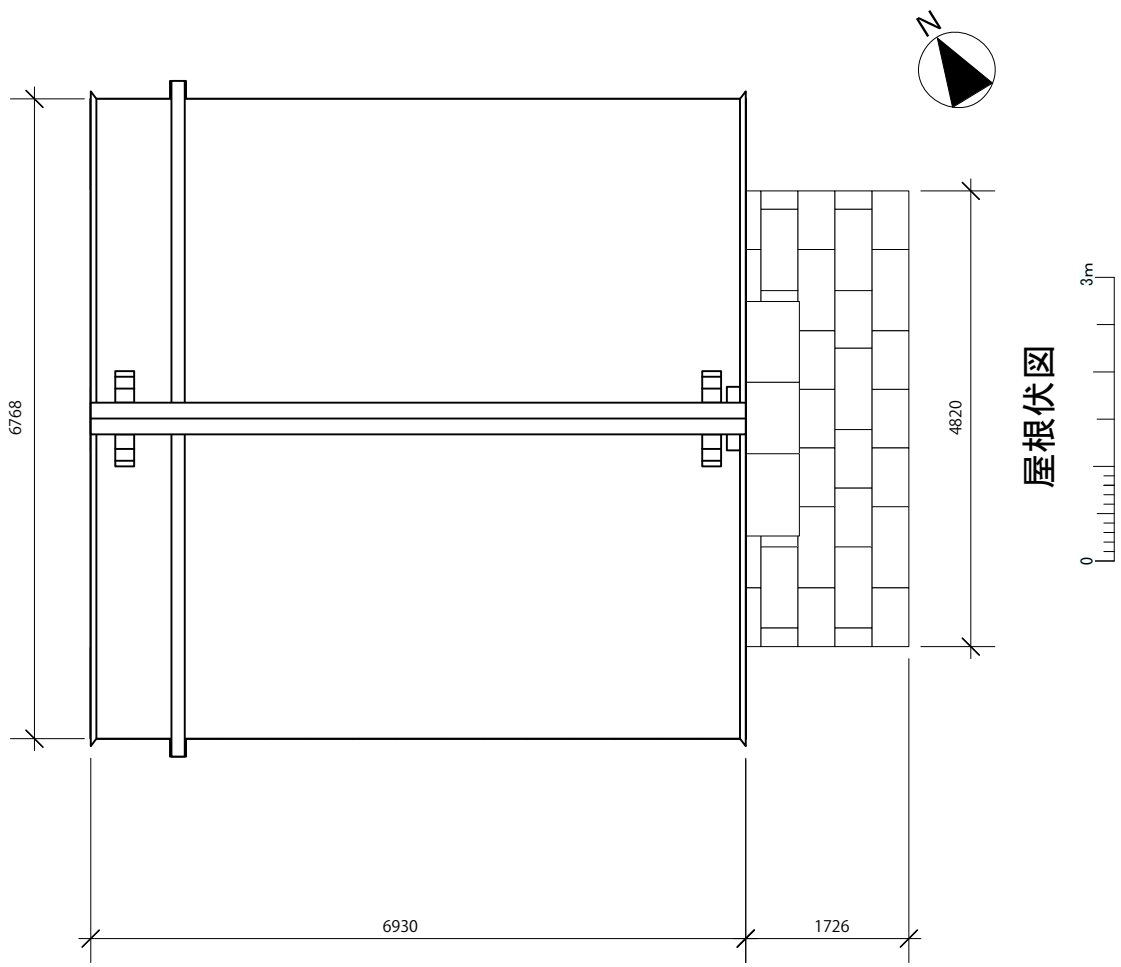


二階防火戸断面図



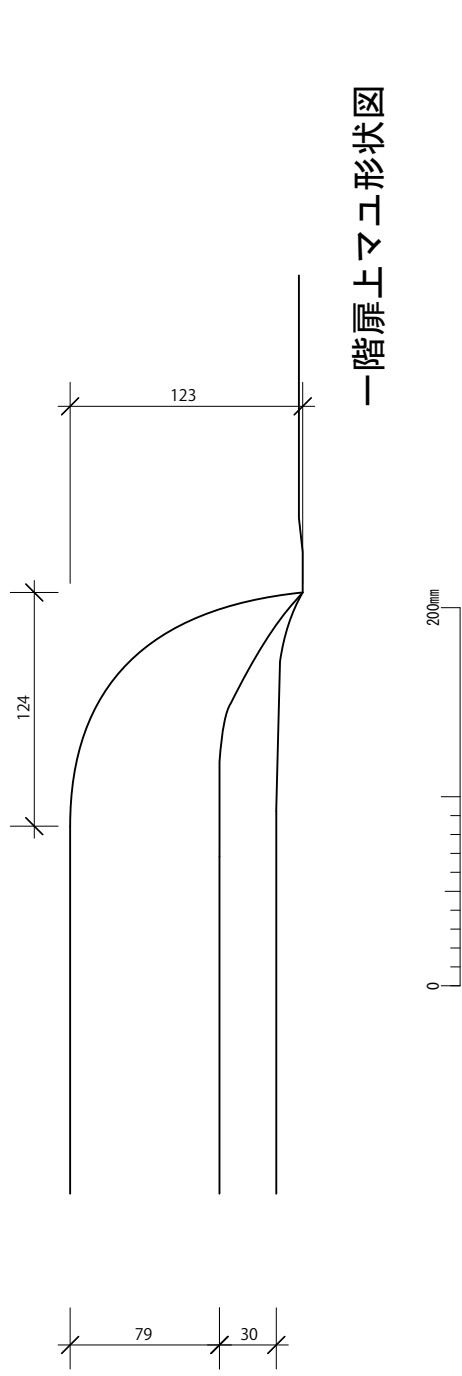


図面 9 土蔵 基礎伏図

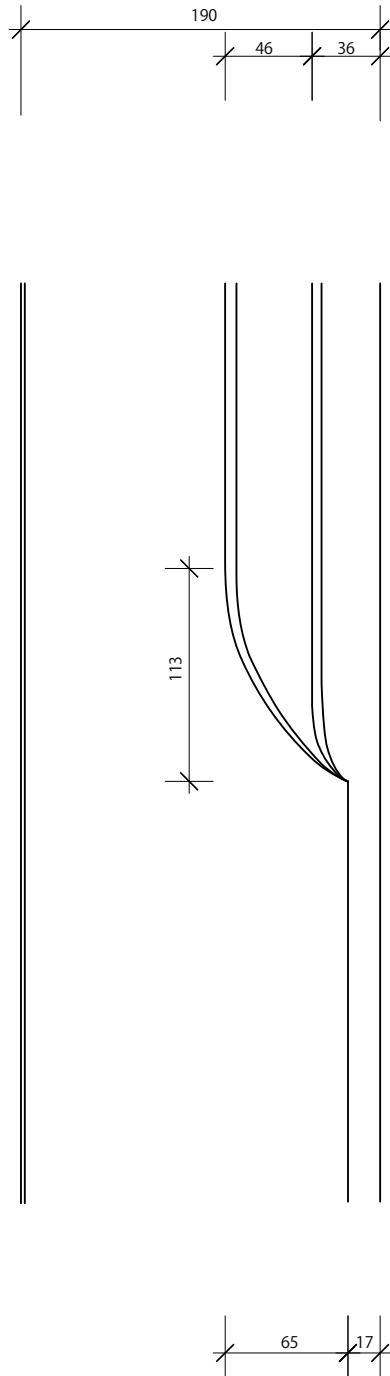


屋根伏图

图面 10 土蔵 屋根伏图

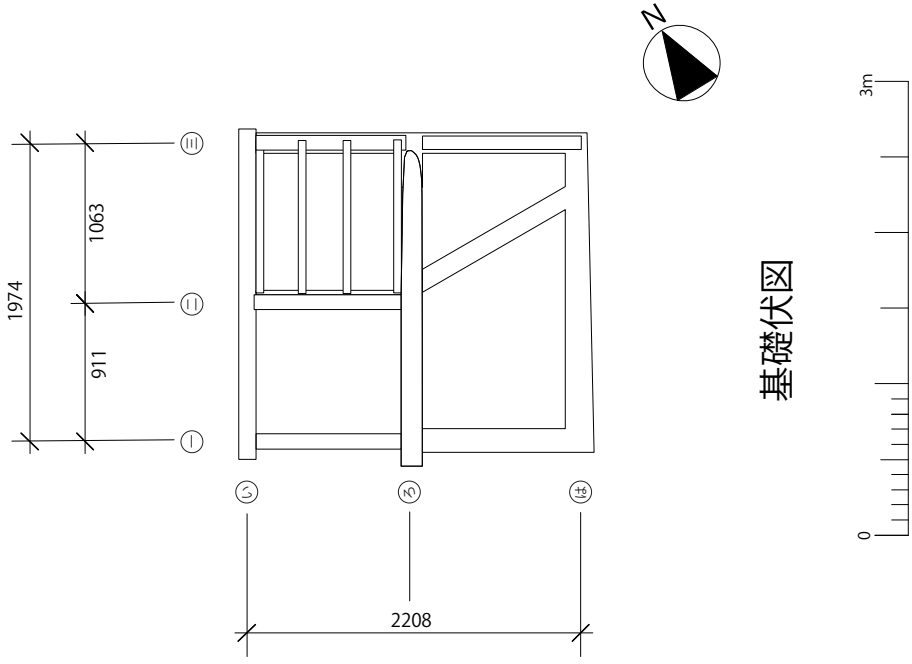


一階扉上マユ形状図

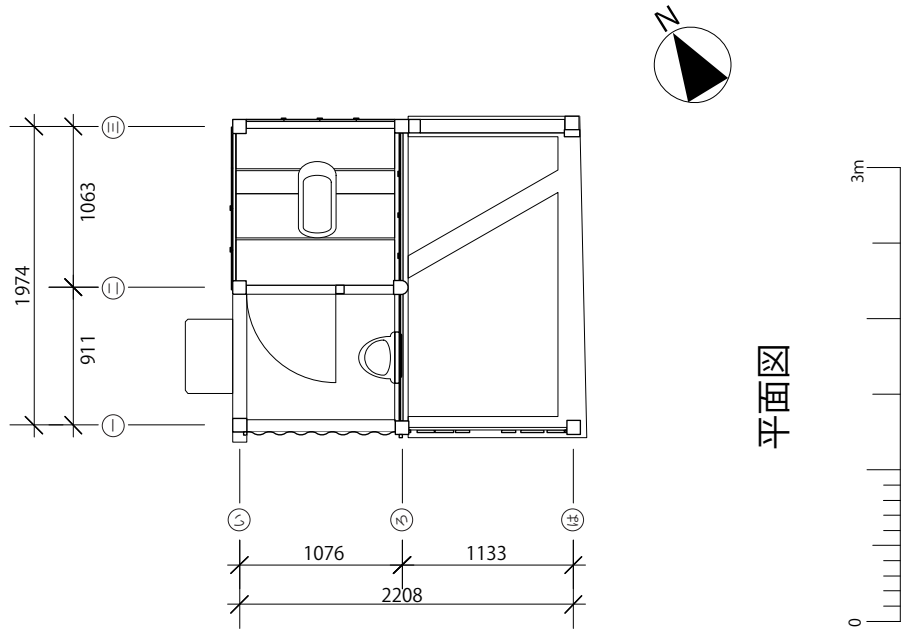


二階扉上マユ形状図

図面 11 土蔵 一階・二階扉上マユ形状図

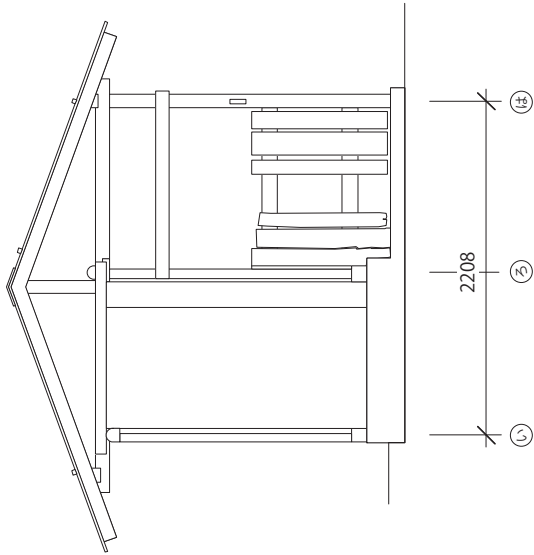


基础伏图

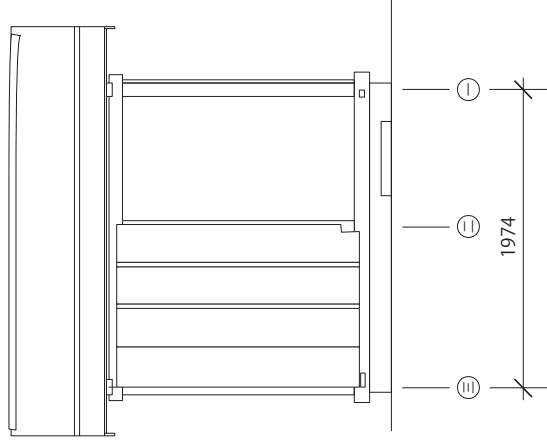


平面图

图面 12 外便所 平面图·基础伏图



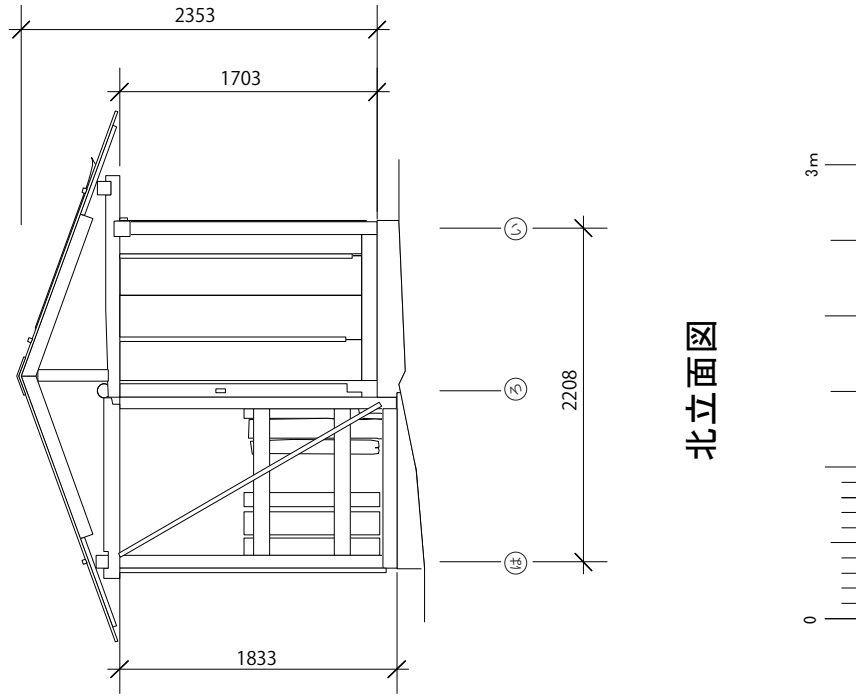
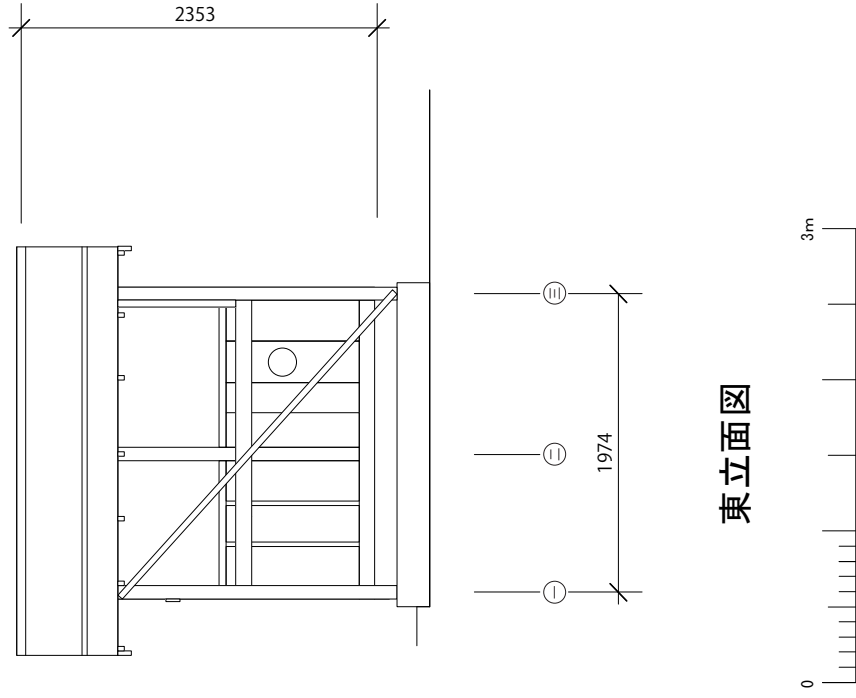
南立面图



西立面图

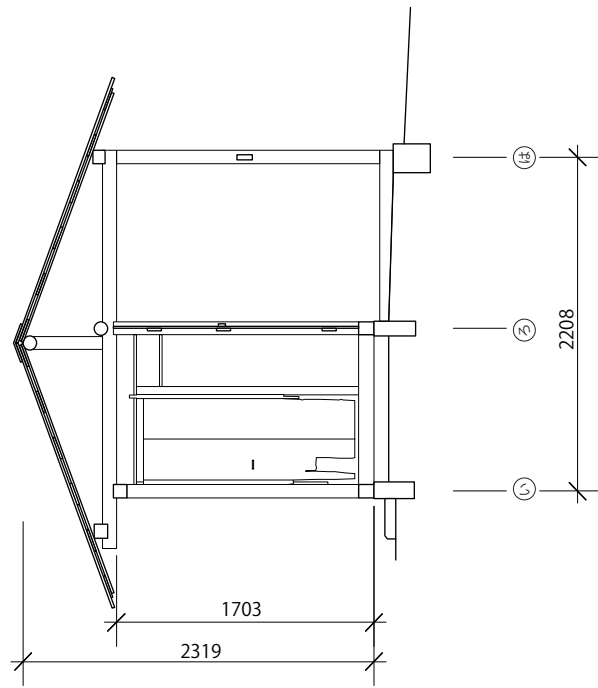
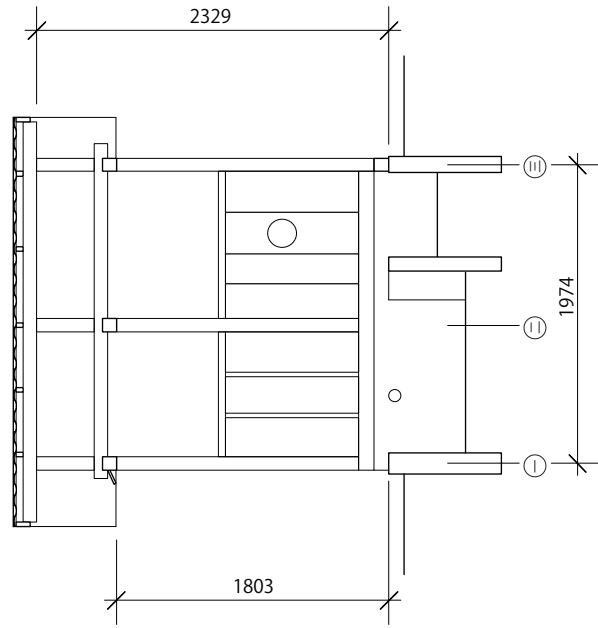


图面 13 外便所 立面图 1

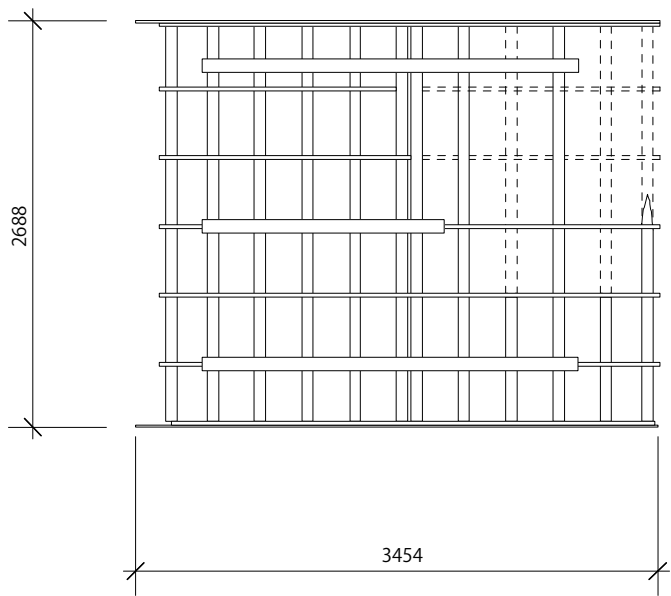


图面 14 外便所 立面图 2

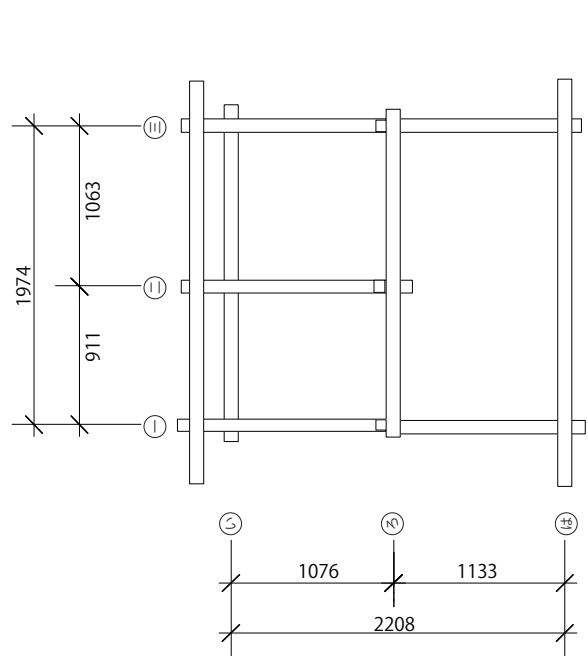




図面 15 外便所 断面図



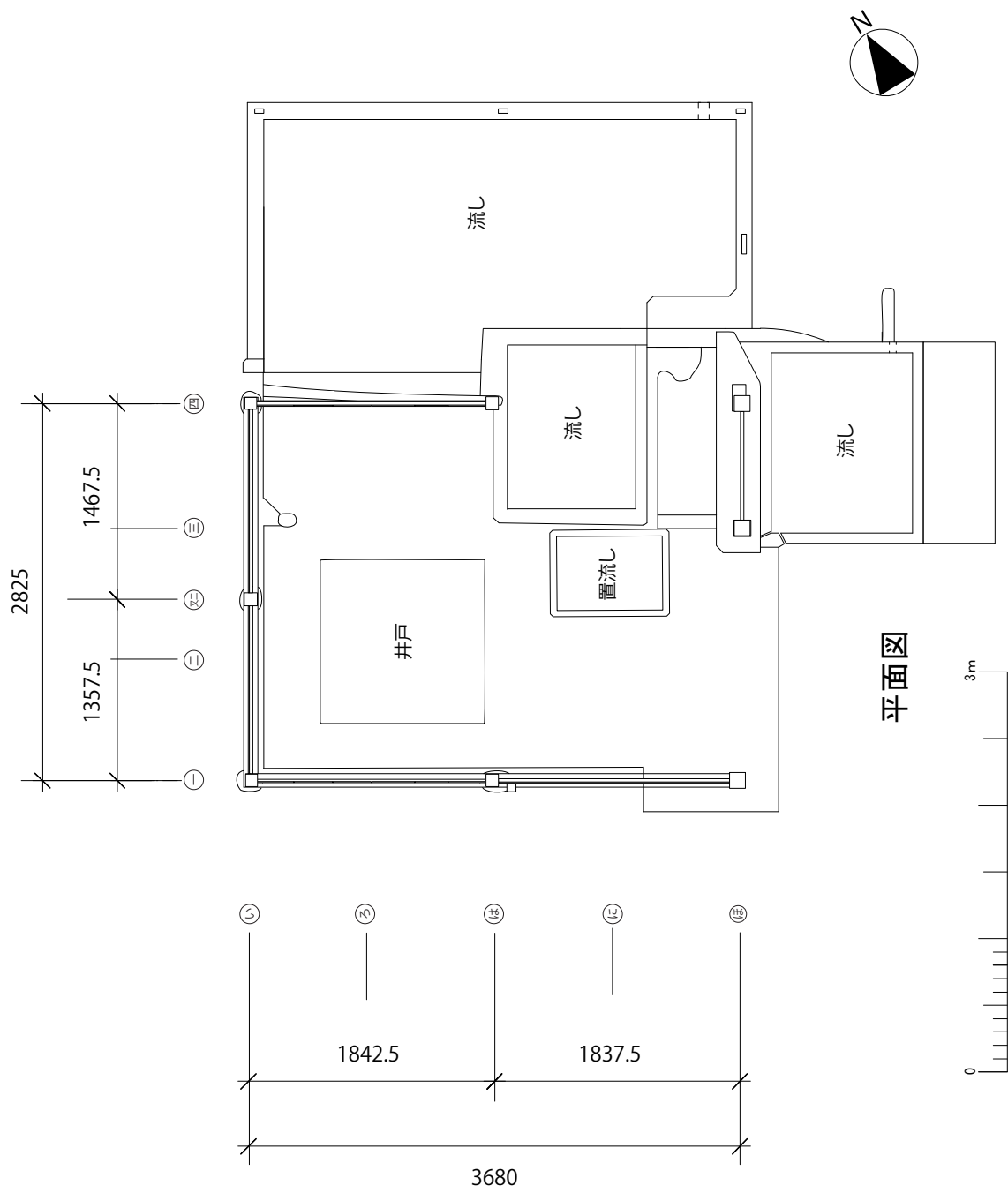
天井伏图



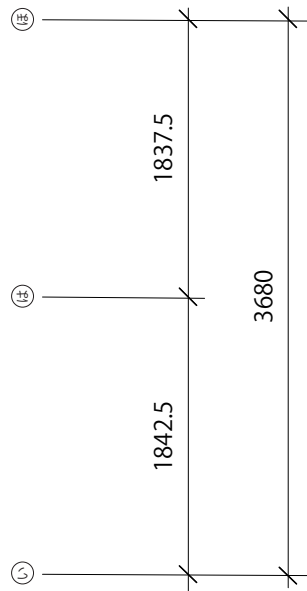
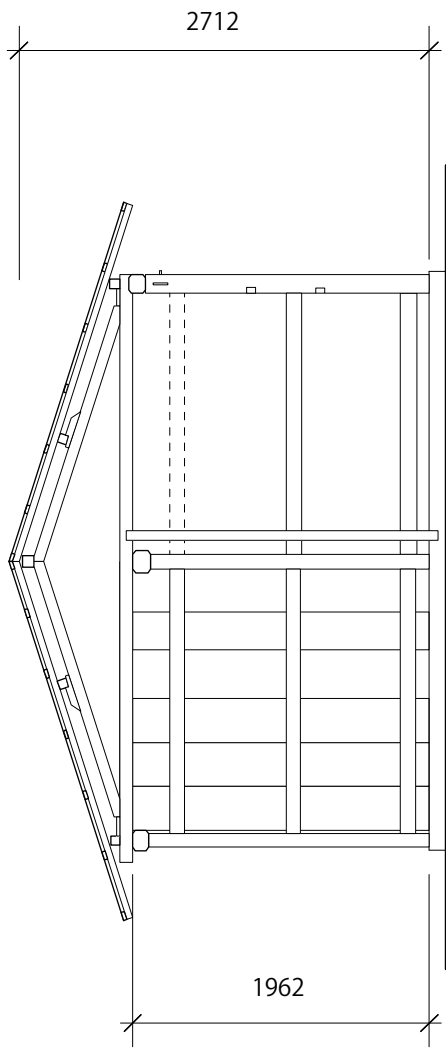
梁伏图



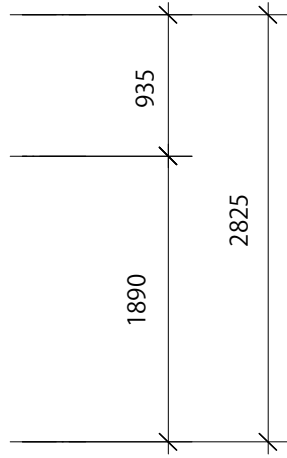
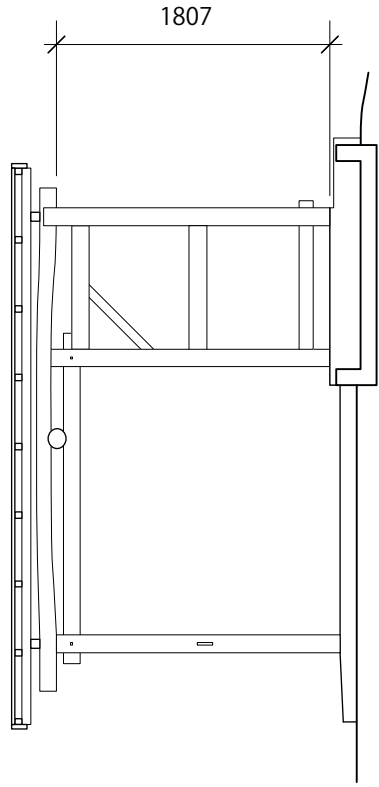
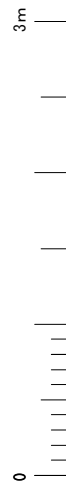
图面 16 外便所 梁伏图 · 天井伏图



図面 17 井戸上屋 平面図



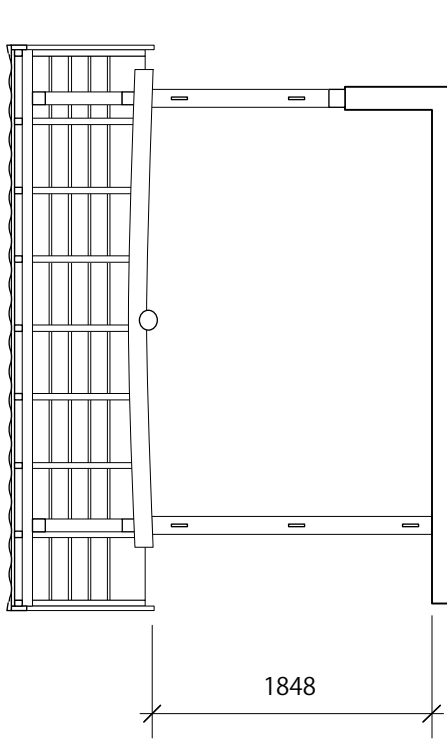
南立面図兼一通り軸組図



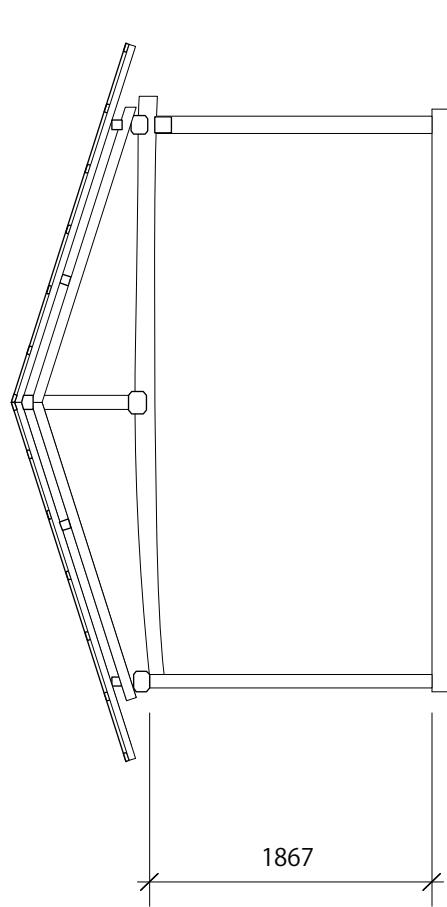
東立面図兼ほ通り軸組図



図面 18 井戸上屋 立面図兼軸組図



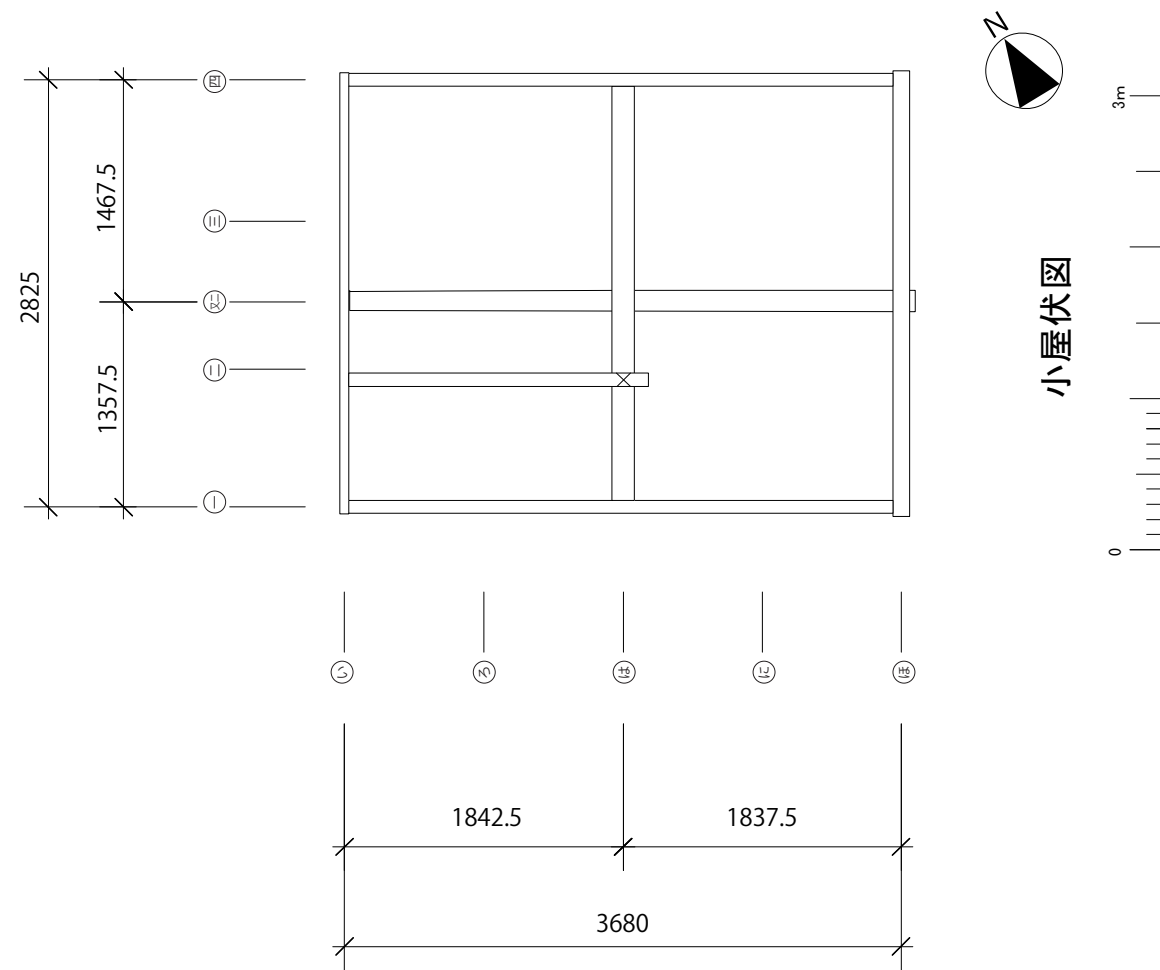
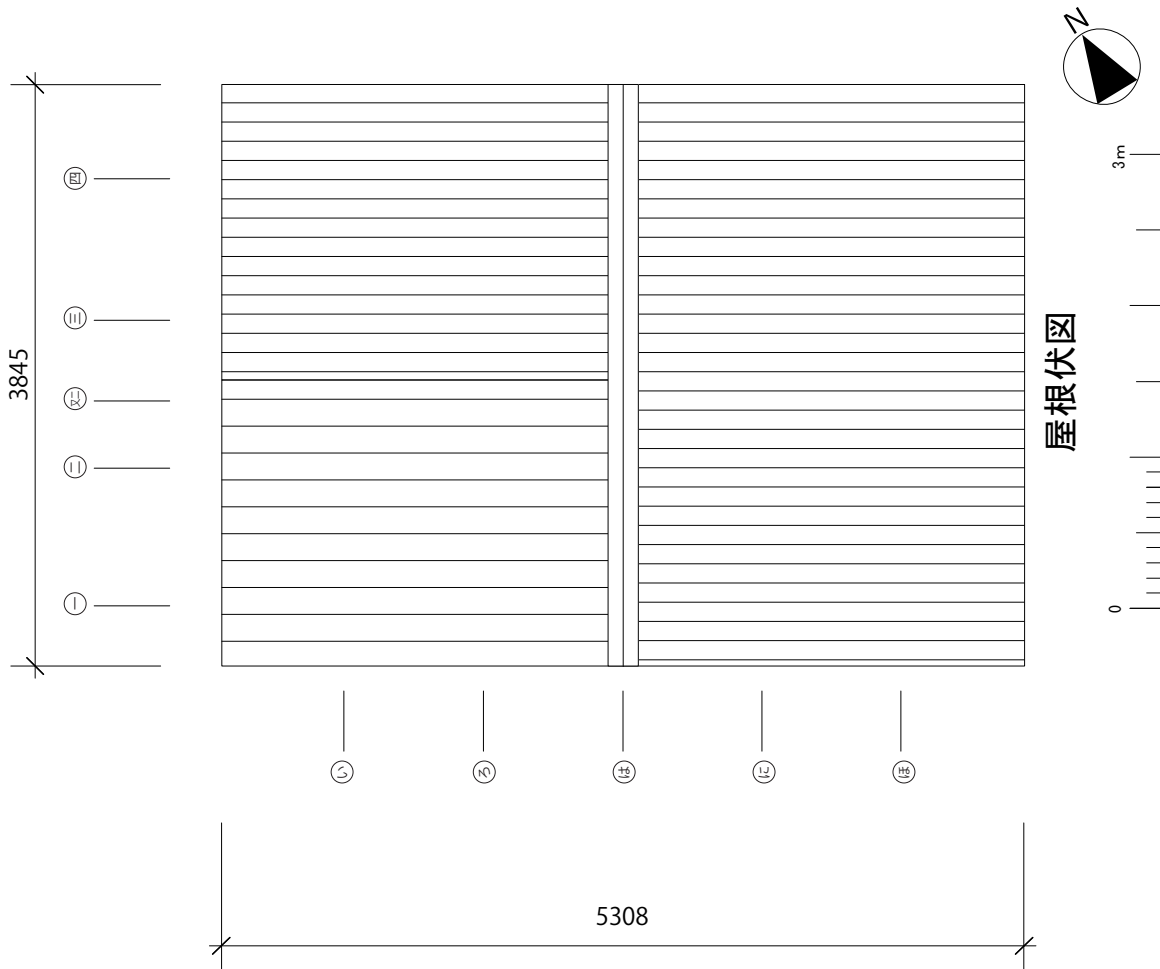
桁行断面図



梁間断面図



図面 19 井戸上屋 断面図



図面 20 井戸上屋 小屋伏図・屋根伏図



土蔵 北面 東から



土蔵 西面 西から



土蔵 東面 一階扉 南東から



土蔵 東面 下屋 東から



土蔵 内部一階 解体前 南東から



土蔵 内部二階 解体前 南東から



土蔵 置き屋根 解体前 北から



土蔵 置き屋根 解体前 北東から



土蔵 置き屋根 箱棟下地材解体 南東から



土蔵 置き屋根 波板板金解体 南東から



土蔵 置き屋根解体前 南から



土蔵 置き屋根解体1 南から



土蔵 置き屋根解体2 南から



土蔵 置き屋根解体3 南から



土蔵 箱棟内部木札確認 南東から



土蔵 箱棟内部木札確認 南東から





土蔵 登り梁と控えの束 南東から



土蔵 置き屋根 垂木解体 北東から



土蔵 鉢巻板金解体 下地板確認 北東から



土蔵 鉢巻板金解体 下地板確認 南から



土蔵 鉢巻 下地板解体 南から



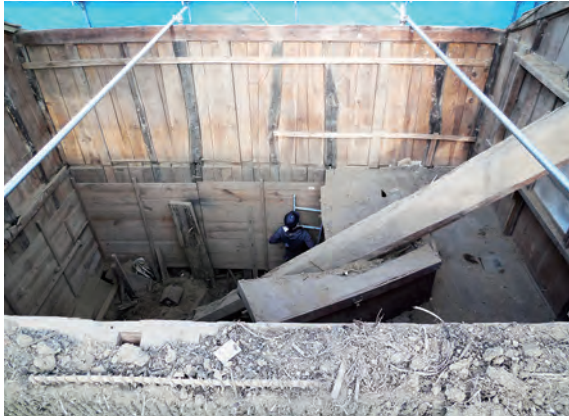
土蔵 鉢巻 土解体 南から



土蔵 西面柱妻部分 木札確認 南から



土蔵 西面柱妻部分 木札確認 南東から



土蔵 内壁 壁板 南西から



土蔵 内壁 壁板 南東から



土蔵 一階内壁 壁板解体後 南西から



土蔵 二階内壁 壁板解体後 南西から



土蔵 南面 下見張り板解体 南西から



土蔵 南面 土壁 西から



土蔵 北面 土壁 東から



土蔵 北面 土壁解体 東から



土蔵 北面 木舞下地 北から



土蔵 南面 木舞下地 南西から



土蔵 北面 木舞下地 北東から



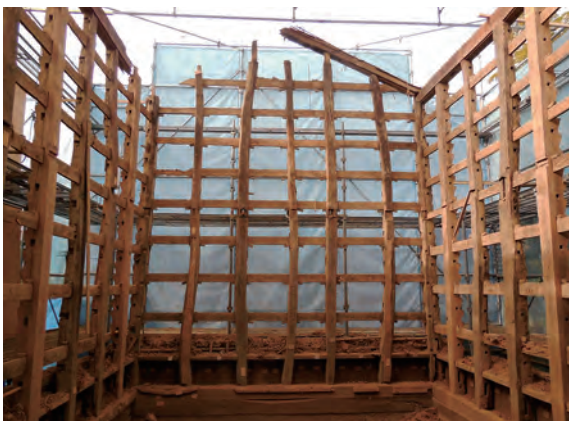
土蔵 南面 木舞下地 南から



土蔵 北面 軸部 東から



土蔵 東面 軸部 北西から



土蔵 西面 軸部 南東から



土蔵 北面 軸部 南西から



土蔵 南面 軸部 北東から



土蔵 二階床 西から



土蔵 二階床根太 北から



土蔵 二階床梁 西から



土蔵 造作棚 南東から



土蔵 一階床板 西から



土蔵 一階床大引き 北東から



土蔵 二階扉 南東から



土蔵 二階扉解体 南から



土蔵 二階扉解体 南から



土蔵 二階扉 漆喰下地 東から



土蔵 二階扉実柱 西から



土蔵 下屋解体 南西から



土蔵 下屋解体 南西から



土蔵 下屋解体 南西から



土蔵 一階扉 南から



土蔵 一階扉 錠繰り部分



土蔵 一階扉 木柄戸



土蔵 一階扉 掛け子 南東から



土蔵 一階扉 肘ガネ 南から



土蔵 一階扉 肘ガネ



土蔵 一階扉 掛け子下地 南から



土蔵 一階扉 実柱腕木 西から



土蔵 一階扉 実柱腕木 東から



土蔵 一階扉 煙返し石 北西から



土蔵 腰巻下地板 北から



土蔵 土台 南東から



土蔵 土台 東から



土蔵 土台繋ぎ 北西から



土蔵 基礎 西から



土蔵 柱材 墨書き



土蔵 内壁材 墨書き



土蔵 内壁材 墨書き



土蔵 内壁材 墨書き



土蔵 内壁材 墨書き



土蔵 一階扉柱材 墨書き



土蔵 一階扉柱材 墨書き



土蔵 腰巻柱根がらみ材 墨書き



土蔵 置き屋根鬼板金



土蔵 和釘





外便所 外観 西から



外便所 外観 東から



外便所 軸部 西から



外便所 軸部 東から



外便所 和式便器 南西から



外便所 小便器 北西から



外便所 土壁 木舞下地 北西から



外便所 基礎 北西から



井戸上屋 外観 北西から 平成 25 年撮影



井戸上屋 内部 南東から 平成 25 年撮影



井戸上屋 外観 北西から



井戸上屋 屋根 北東から



井戸上屋 ポンプ 南西から



井戸上屋 モルタル流し 東から



部材の保存状況



金物類の保存状況

---

相模原市文化財調査報告書

**旧笹野家住宅付属建物**

**解体・記録保存調査報告書**

発行日 令和7年(2025)3月21日  
編集・発行 相模原市教育委員会 教育局  
生涯学習部 文化財保護課  
〒252-5277  
相模原市中央区中央二丁目11番15号  
電話 042-754-1111 (代)

印刷 株式会社 P栄文舎

---

